

## 波崎町舎利地区の生活形態とその変容

田林 明・川口 洋・丸山 浩明  
 洪 顕哲・篠原 秀一

### I はしがき

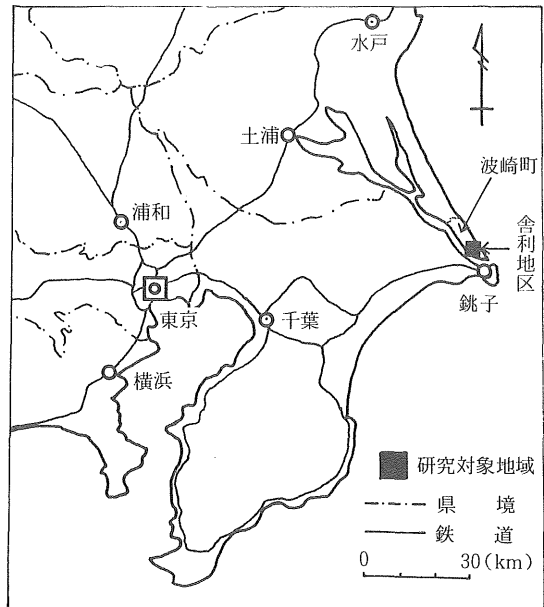
鹿島郡波崎町は茨城県の最南端に位置し、利根川と鹿島灘にはさまれた半島状の地域である。この地域の大部分は砂礫層から成る3~10mの低い台地で、表面は崩壊した砂丘砂によっておおわれている。また、海岸ぞいには新期砂丘が、利根川ぞいには沖積地が発達し、内陸中央部には旧期砂丘が断続的に並んでいる<sup>1)</sup>。波崎町では中世以前に成立した古い集落は利根川ぞいに、江戸期の新田集落は鹿島灘にそって立地している<sup>2)</sup>。調査地域の舎利地区は、その成立が15世紀以前とされるが<sup>3)</sup>、半島状の地域の内陸部に位置する唯一の例である(第1図)。一般にこの地域の集落は海岸や川岸に最初に形成され、漁業や交易を生業としながらしだいに田畑の開発を進めたといわれるが、舎利地区の場合は、その位置からみて、早くから農業を主な生活基盤としていたとみられる。おそらく海岸砂丘地帯の背後の低地では地下水位が比較的高いため、それを利用して水田開発を行ったものであろう<sup>4)</sup>。

この地域の年平均気温は15.2℃と温暖である。年降水量は1,500mm前後と関東地方で最も少なく、ことに7月と8月には乾燥するため、夏作物の栽培に大きな障害となった。保水力の低い砂質土壌が卓越することからも、乏水性というこの地域の自然特性は、生活形態にさまざまな影響をおよぼした。例えば、この地域は1960年代には関東の普通畑作地帯として位置づけられたが、その中でも栃木県南部から茨城県西部にかけての陸稲・麦地帯と千葉県北部と茨城県中南部の落花生・麦地帯に対して、甘藷・麦地帯とされた。これは、甘藷が耐旱性にすぐれていたからである<sup>5)</sup>。さらに水稲作は田面を掘り下げ地下水面に近づけ、水分を確保しようとする掘下田

で行なわれた。黄色種タバコや干兩、若松なども、温暖で水はけの良いこの地域に適していた。

舎利地区は相対的に内陸に位置しているとはいえ、海岸から決定的に離れているわけではなく、イワシの地曳網も大正期までは重要な収入源であった。さらに、波崎の市街地に近く、古くから賃労働の機会にも比較的恵まれていた。野菜を市街地で販売し、帰途にイワシの煮汁を持ち帰り肥料にするといい、小規模な近郊農業的経営も第二次世界大戦前からみられた。また、近年の鹿島臨海工業地帯の形成による雇用機会の増加や<sup>6)</sup>、東京大都市圏外縁にあつて園芸農業地域として発展しつつあるという現象もみられる。

このように舎利地区の生活形態は、自然条件と位



第1図 研究対象地域の位置

置的條件そして経済的條件といった場所の条件によって規定されるとともに、集落の歴史的経緯や伝統、技術水準、住民の志向などにも左右される。そして生活形態の特徴は、景観や土地利用にも明瞭に現われている。この報告の課題は、舎利地区の生活形態の性格を、集落の土地利用と景観、生業の変遷と現在の農業経営および就業構造、そして社会組織構造の分析を通じて明らかにすることである。

舎利地区は元々、松本、芝、内出の3つの集落から成る大字であったが、明治初期に舎利浜が成立した。この報告では古くからの3つの集落を取り扱うことにする。1985年10月の住民基本台帳によると、松本、芝、内出のそれぞれの集落の戸数は80戸と47戸と76戸であり、人口は340人と213人そして340人であった。この地区は藩政期には舎利組とよばれ、高野組と波崎組とともに東下村をつくっていたが、1889年(明治22)に町村制が施行され、東下村の一大字となった。1928年(昭和3)には町制が施行され東下村は波崎町となったが、さらに1955年から1956年にかけて矢田部村と若松村を編入し、現在の波崎町ができあがった。

## II 土地利用と景観

### II-1 土地利用の変遷

ここでは1884年(明治17)測図の陸地測量部の2万分の1迅速図、1939年(昭和14)発行の2,700分の1の土地宝典、1985年5月の現地調査による土地利用図<sup>7)</sup>を利用し、さらに5万分の1地形図や空中写真を参考にして、明治期以降の土地利用変化を概観してみよう。

#### a. 明治中期の土地利用

鹿島郡東下村々是によると、明治末頃の舎利組の田畑別耕地面積は、田が95.8ha、畑が88.1haであった。当時東下村全体の田の面積が178.6ha、畑面積が256.7haであったことから、舎利組の耕地面積は東下村全体の41.6%を占め、特に田は53.6%に達していたことがわかる<sup>8)</sup>。

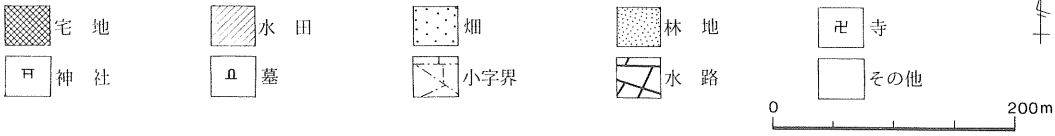
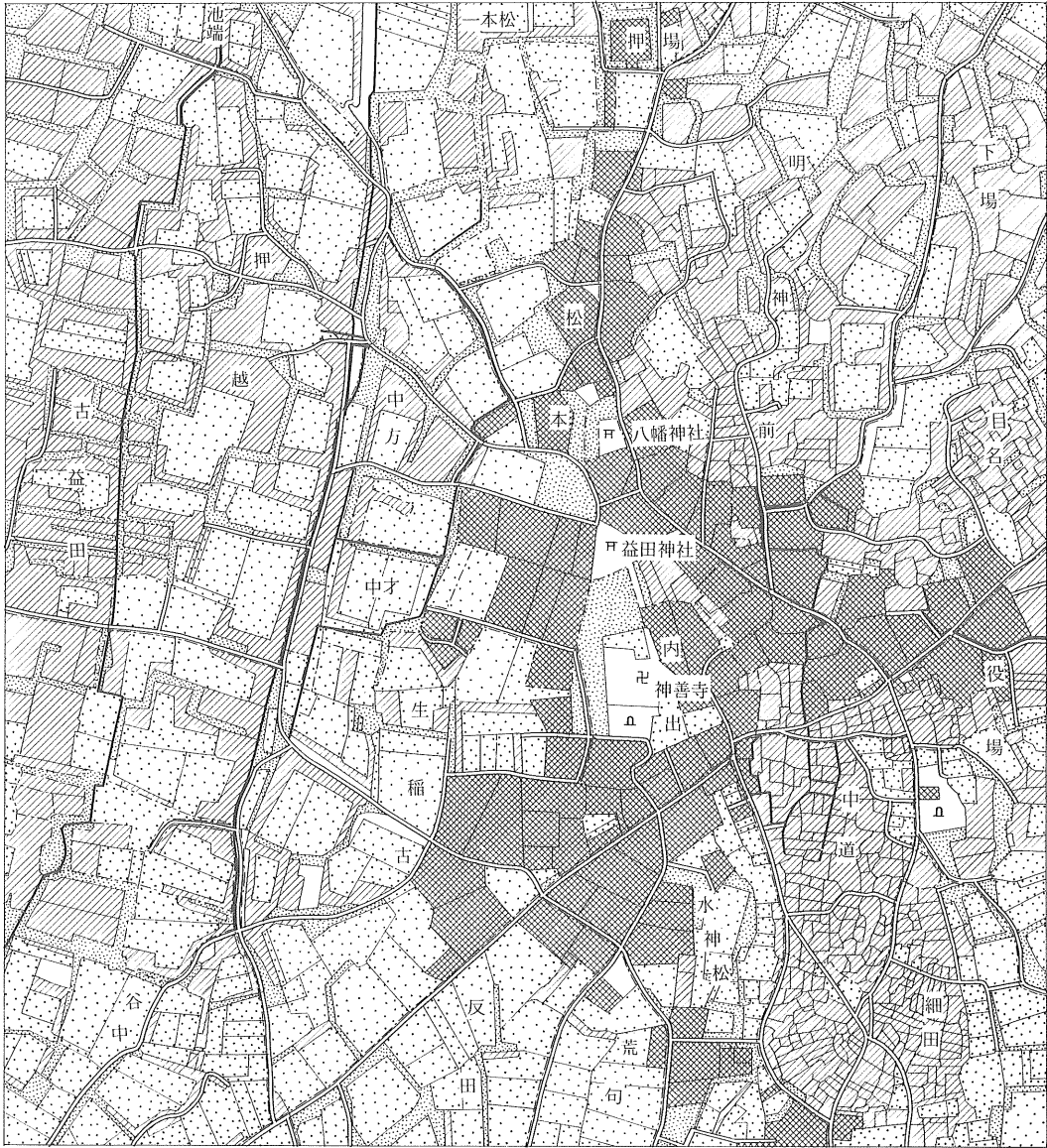
迅速図から明治中期の土地利用をみると、今日の土地利用の骨格がすでにこの時期に形成されていたことがわかる。すなわち、塊村形態を示す集落を中心に、その北部と東部には水田が、西部と南部には畑地が広く分布していた。林地は、舎利地区の外縁部、すなわち、海岸ぞいの豊ヶ浜(現在の舎利浜)、

利根川ぞいの荒波地区や別所地区、あるいは矢田部村との境界域に広く分布していた。そのほとんどが松林から成り立っていた。この松林は飛砂を防ぐ役割をしており、さらにプロパンガスの普及以前には薪の供給源として重要であった。舎利地区の北西部の字外濱割、字内割、字下割では地割が規則的であり、明治期になってから開拓したといわれる掘下田が林地の中で一定の方向に並んでいる。集落の中心部から放射状に広がる舎利地区の道路のうち、矢田部から舎利地区を抜け、別所地区に向うものが主要道路であった。集落は、字中道と字水神松を除き、前述の主要道路や現在の舎利浜から荒波地区に向う道路ぞいに広がっていた。

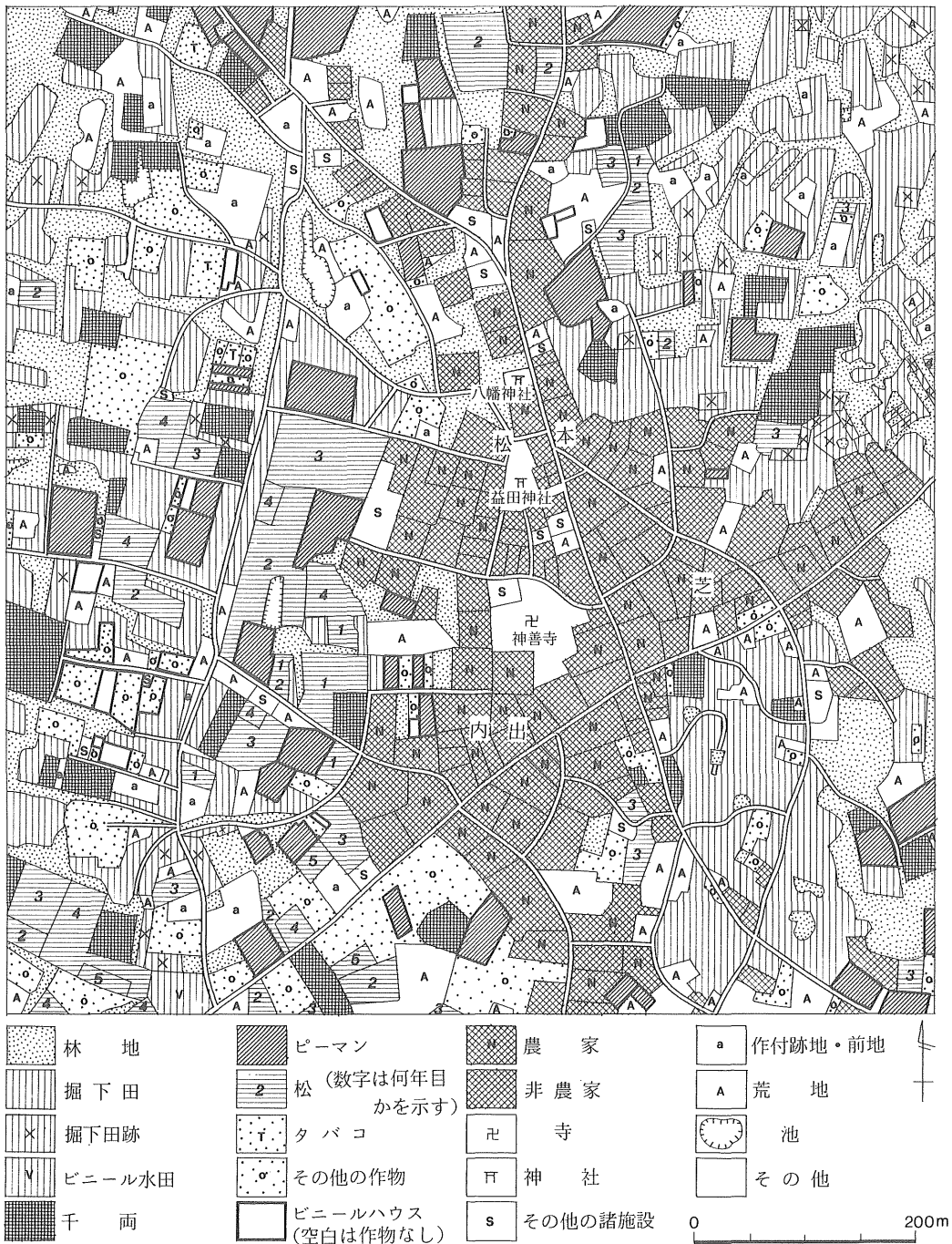
#### b. 昭和初期の土地利用

次に舎利地区における昭和初期の土地利用を土地宝典を基に作成した土地利用図から検討して見よう(第2図)。明治中期の土地利用と比較すると宅地の広がりには大きな変化が見られないが、字押越と字一本松で水田が畑地に変化した反面、字明神前周辺では畑地が水田にかわった。もう1つの変化は道路網の改化である。明治中期には、大部分の道路が海岸から利根川の方へ半島を横断していたが、昭和初期の土地宝典には舎利地区を抜け、半島を縦断する道路が見られる。集落の西では耕地の区画が広く、形が規則的であるのに対し、字中道、字細田、字目名を中心とする東部の水田地帯では、一筆あたりの耕地が狭いうえに、形も不規則であった。

この地域の土地利用形態で特徴的な点は、畑の周囲が掘下田として利用され、その掘下田の回りをさらに林地が取り囲んでいることであろう<sup>9)</sup>。これは、掘下田を造成する際に掘り上げられた砂の捨て場が、畑地として利用されている場合が多いからである。波崎町史料Ⅱに収録されている「田畑開発仕方」によると<sup>10)</sup>、掘下田は、松の木を伐採・伐根し、70cm程度砂を掘り出した跡地に、刈りとった芝を入れ、その上に砂をかぶせて造ったという。近世中期の掘下田の造成には10a当り150人の労力を必要とした。ただし、草原状の所では10a当り70~80人の労力でも十分であったといわれる。これに対し、芝を刈り、砂を掘り上げて造成する掘上畑には10a当り50人余りの労力が必要とされた。掘下田と畑が隣接している場所が多いが、これは掘下田の土を積み上げ畑を造成したと考えられ、労働力の面からも



第2図 昭和初期における舍利地区の土地利用  
 (1939年発行の波崎町土地宝典による)



第3図 1985年の舎利地区の土地利用

(1985年5月の野外観察による)

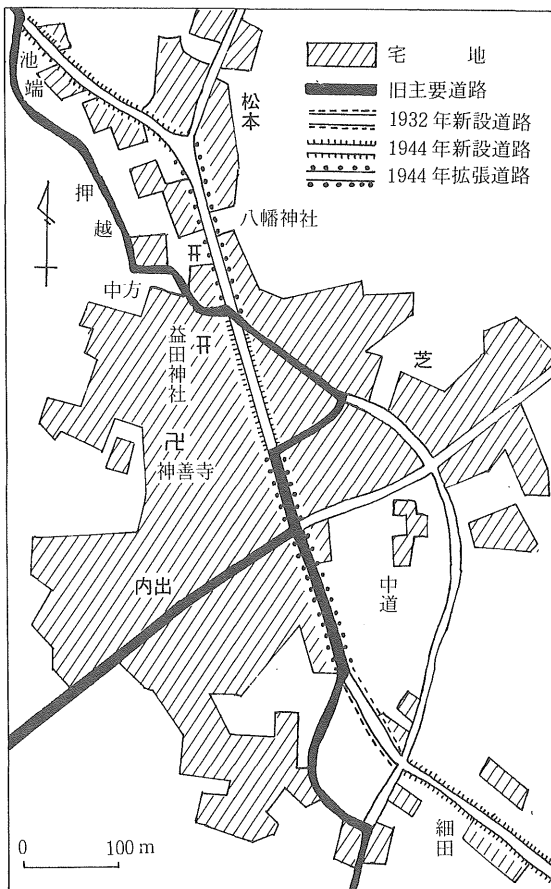
掘下田と掘上畑をセットにする方が有利であったと考えられよう。

この地域では水路が耕地を中心に、南北方向に3本走っていた。つまり、字明神前南端から字中道に延びる水路と、一本松から中方を経由して字生稲古に至る水路、字池端の北から字押越を経由して字谷中に至る水路である。

また1939年(昭和14)頃の主要道路は、現在と異なり、字池端から字押越へぬけ、字中方を経て、八幡神社と益田神社の間に出て、さらに集落の中央を通り、字細田に抜ける道路であったことがわかる(第4図)。

### c. 現在の土地利用

昭和初期と現在の土地利用を比較すると、畑地と水田の分布には基本的な変化が見られないが、わず



第4図 道路網の変遷  
(聞きとりによる)

かに字中道や集落の南西部のかつて畑であった場所が現在では掘下田やビニール水田に変わっている。他方、松本の北では、かつて水田であった場所が現在では畑地に転換されている。また明神前や下場、中道などの小字ではかつての水田が現在では放棄されているし、集落の西の押越、生稲古、谷中などの小字でも、かつての畑地が大きく変化した。現在の道路網の骨格は1944年(昭和19)頃にできあがった。この頃、第二次世界大戦に伴う軍需物資輸送のために、字細田と字松本に3本の新設道路が建設され、さらに、既存の道路の一部が拡張された。その結果、これらの新設道路に沿って新しく家屋が増加し始めた。農地から宅地への変化は、この他にもかつて水田であった越賀、鷺沼、中道などの小字の一部にも認められる。また、宅地一戸当りの面積が、1939年(昭和14)の土地利用図に比べ、1985年の土地利用図では小さくなっており、分家の増加に伴い、宅地が分割されていったと考えられる(第3図)。

1985年5月の土地利用図を見ると、掘下田やビニール水田で栽培される水稲の他に、畑では、千両、ピーマン、若松、タバコ、落花生、自家用野菜などが栽培されている。芝の北部の畑では現在、落花生が栽培されているが、この畑はかつて掘下田であった場所を埋めて作ったものであり、その際、周囲の道路の高さまでは埋めなかったため、外観からも容易に掘下田の転換地であることがわかる。このような景観はあちこちに見られる。

他の作物より手がかかり、十分な管理が必要とされるピーマンは、若松や千両に比べ、宅地に近い場所に多く分布している。一方、千両や若松は、宅地より離れた集落の西方に多く分布している。

次に、現在の重要な土地利用種目である掘下田、ビニール水田、ピーマン、千両、若松の5つについて、その景観的特徴をみてみよう。

## II-2 農業景観

### a. 掘下田とビニール水田

舎利地区の水田には、伝統的な掘下田と1965年以降増加したビニール水田の2種類がある。掘下田は田面を地下水面に近づけるために砂を掘り下げて造成された水田で、周辺の土地よりも30cm~2m低く、大きさは様々である(写真1, 2)。掘った土砂は回りの「土揚場」に置かれるため、掘下田は一層深く

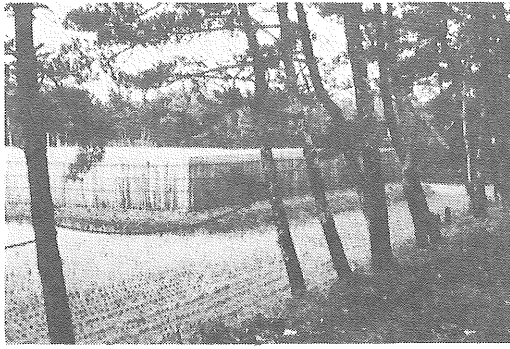


写真1 掘下田と千両のガクヤ(1985年12月撮影)

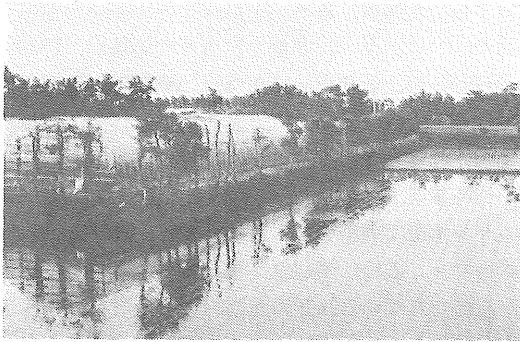


写真2 ビーマンのビニールハウスと掘下田(1985年5月撮影)

は、この地域では水の過剰より水の不足の方がより重要な問題であることを示している。また、1960年頃までは多くの農家が足踏水車を用いて灌漑・排水を行っていたが(写真3)、現在では、ほとんどが電気ポンプを利用するようになった。掘下田では農閑期に田面を15~30cmほど掘り下げ、地下水面に近づける「床下げ」作業が昭和初期まで行なわれていた<sup>11)</sup>。また、旱魃の際には10aの水田に20m<sup>2</sup>ほどの広さで1mほどの深さの池を7つほど掘って地下水を貯え、手オケやバケツを用いて灌漑した。また、耕起や田植、稲刈りの際に耕耘機や田植機、コンバインなどが入れられるように、水田の堤の一部を削り、ゆるやかな傾斜面にしている所もある。

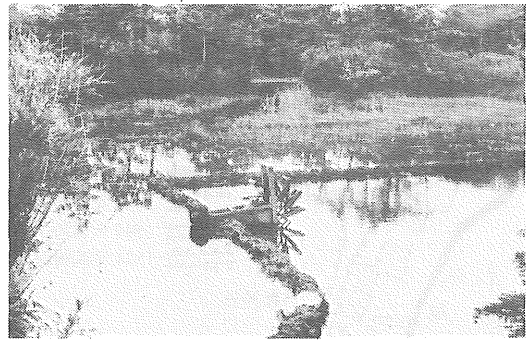
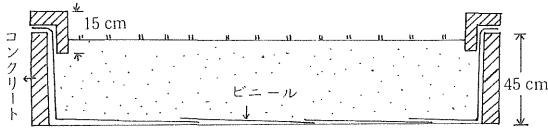


写真3 掘下田の足踏水車(1985年5月撮影)

見える場合もある。「土揚場」には、土手の崩壊を防ぐためや防風、防砂を目的として、松が植えられている。風の卓越方向にあたる海岸側のみに松や竹が植えられている場所もある。松の木と松の木の間には、ロープや針金が張ってあったり、鉄パイプなどが結びつけられており、稲掛として利用されている。

掘下田は完全な天水田であるため、旱害をうけやすいうえに、雨の多い年には排水不良による被害をうける。舍利地区では元々地形的に低い場所に掘下田が造成されており、中道、目名、細田、鷺沼、押越、古益田などの小字に多い。田植時期に雨が続き、掘下田はまるで池と見まちがえるような景観になる。それぞれの掘下田には、幅50cm程度の排水口が設けられている。しかし、この排水路は一部の掘下田と掘下田をつなぐ程度であり、ましては海岸まで伸びる大規模なものほとんどない。このこと

一方、1965年頃からビニール水田がこの地域に普及した。ビニール水田とは、漏水を防ぐために水田の底にビニールを敷いた水田のことである。水田のまわりをコンクリートのワクで囲み、ビニールを固定するとともに、側方向への漏水を避ける(第5図)。ビニール水田の造成方法は、まず、畑地もしくは伐採した林地に、幅90cm、深さ30cmほどのみぞを掘り、そこに180cm幅のビニールの端を折ったままで敷く。次いで、そのみぞの幅を90cmばかり横に拡大し、掘った土をビニールの上ののせると同時にビニールを横に広げる。このような作業をくり返す。さらに井戸を掘って水源を確保することによって水田ができあがる。この地域では、地下水面の深さが8~15m程度であり、1本の井戸で約50aの水田への給水が可能である。井戸を2本掘り、1本を予備としている農家もある。1960年代には、10aのビニール水田を造成するのに延べ20~25人の労力が必要で



第5図 ビニール水田の模式断面図

あった。

#### b. ピーマン栽培

ピーマンが栽培されるビニールハウスは高さ約2 m、幅約4 m、長さは場所により異なるものの、通常20~30 m程度の半円型をしている(写真2)。このようなビニールハウスが、一つの畑に10~20棟建てられており、さらに、灌漑用の井戸が設けられている。この井戸からは直径約8 cmの給水パイプが伸びており、その給水パイプから、直径約3 cmの細いパイプが枝分かれしている。それぞれのビニールハウスには、3本の細いパイプが引かれており、各々のパイプの両側に、ピーマンが1列ずつ全部で6列植えられている。また、ビニールハウスには気温の調節と換気を目的とした通風窓が備えられている。ビニールハウス内の気温が35°C以上を越えると実が奇形になるため、毎日、朝と夕方の2回、窓をあけて換気している。

#### c. 千両と若松の栽培

千両は直射日光のもとでは栽培できないため、「ガクヤ」と呼ばれる囲いの中で栽培されている(写真1)。「ガクヤ」は、1950年代までは葦を針金で編んで作った葦簀で作られたが、台風などに弱く、耐久年数が短いなどの理由から、現在では竹を縦に細かく割って編んだ竹簀を利用している。柱とはりには金属パイプが使用されている。「ガクヤ」の高さは約1.8 mである。「ガクヤ」の中には、千両がまっすぐに伸びるように枝をつり上げる紐が何本もつるされている。このような「ガクヤ」の造成には、人件費、材料費など、10a当り120万円もかかる。大規模な千両栽培農家になると、竹を直接購入し、自家労働力で機械を用いて簀を編む。舍利地区の農家の「ガクヤ」は、波崎町内の他に千葉県側にも広く分布しており、その面積の割合はほぼ半々である<sup>12)</sup>。千葉県側の「ガクヤ」は、その9割が借地につくられている。

千両と並び、正月用の若松や根引松も広く栽培さ

れている。若松は、その年数によって畑の景観が大きく異なる。若松の種がまかれたばかりの1年目の畑は、鳥から種を守るために5 mmほどの目の細かい網でおおわれている。若松は、播種した年の翌年の3月には、高さが約5 cm、同年12月には20 cm、3年目の12月には約60 cmになる。4年目の11月末には高さが120 cmほどの若松になり出荷される。若松の場合、1 mの畝に10 cm程度の間隔で10列の苗木が植えられている(写真4)。また、株間も約10 cm間隔である。これに対して、根引松は、畝間を約5 cm、株間を約15 cmにして栽培される。

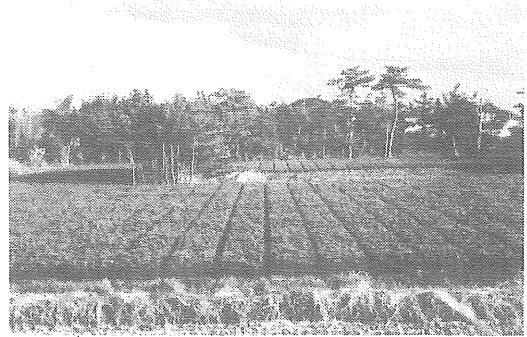
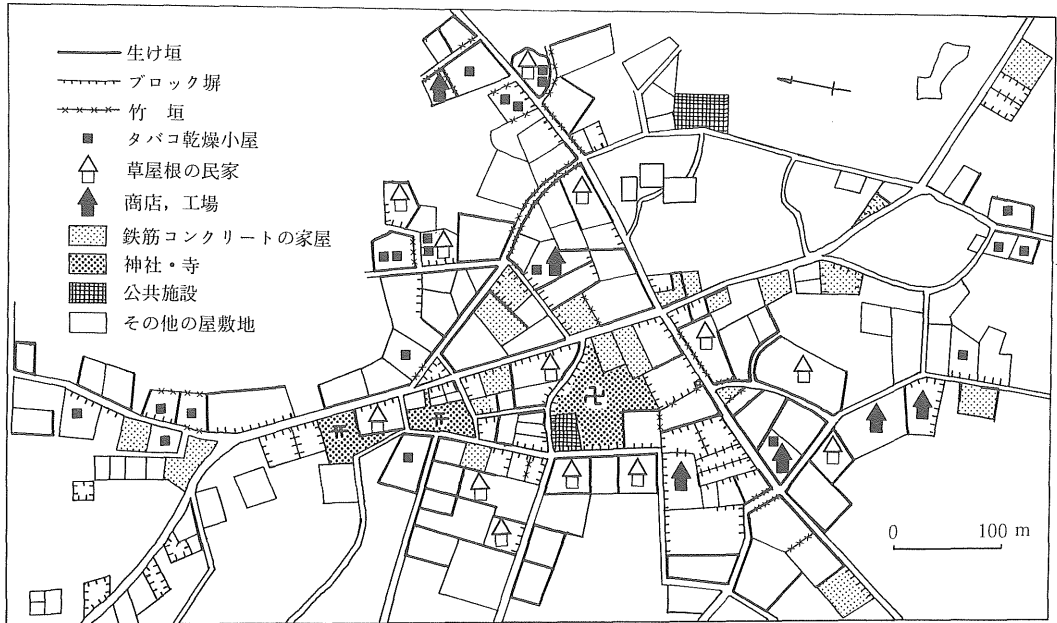


写真4 若松(2年目)畑(1985年12月撮影)

### II-3 集落景観

舍利地区の集落は、益田神社、神善寺を中心として、東西約600 m、南北約1 kmにわたって塊状に発達している。南東のブロックは、低湿地にあるために家屋が少なく、掘下田となっている。集落の中心部をほぼ南北に鹿島から銚子に至るバス道路が通っており、これと直交する舍利浜から荒波に至る道路の2本が、集落の中で最も交通量の多い道路である。

1985年の調査時には、バス道路の両側に商店や工場が分布しており(第6図)、食堂、ガソリンスタンド、酒屋、雑貨屋、理容店、種子屋、通信業、運送業、食品工場、建設業、自動車整備工場などの業種がみられた。とくに、2本の主要道路が交差し神善寺にも隣接している雑貨屋周辺は、人通りが多く、集落の中核となっている。また、公共施設として、1985年に茨城県、波崎町の補助を受けて建てられた舍利農村集落センター、火の見やぐら、他に、神善寺境内の一角に舍利保育園がある。



第6図 1985年の舎利地区の集落景観  
(1985年5月の野外観察による)

農家は、バス道路両側の商店や工場の背後に分布する。商店、工場の建物が道路に面して建てられているのに対して、農家の主屋は道路から離れた屋敷地の奥に位置するものが多い。屋敷地内には、主屋のほかに、倉庫、ピーマンの袋詰め作業舎、タバコ乾燥小屋などの付属舎がある。

屋敷地は、垣根によって境界が画されている。集落全体としては生け垣が卓越しており、樹種はツゲ、マキが最も多く、松などもみられる。ブロック、コンクリート、または大谷石を材料とした塀は、生け垣と比較して少なく、バス道路両側、および神善寺を中心に分布する(第6図)。商店、工場、および鉄筋の家屋には、ブロック塀を巡らしたものが多い。松本、内出ではブロック塀が約半数を占め、芝では生け垣が多い(写真5)。とくに、高さ2~3mのマキ垣と高さ1mの竹垣を組み合わせた垣根は、芝地区の集落景観の特色の1つとなっている。

民家の屋根の形態は、瓦葺きの寄棟形式が卓越している<sup>13)</sup>。現在草屋根を残している民家は14戸である(写真6)。いずれも屋根にコケや雑草が生えており、近年葺き替えた形跡は認められない。聞き取

りによれば、伝統的な草屋根から瓦葺に変化し始めたのは、1970年以降のことである。一方、鉄筋を用いた住居も6戸確認できる。この6戸の中には、千両を大規模に栽培している農家が含まれ、千両の出



写真5 芝のマキ垣(1985年12月撮影)



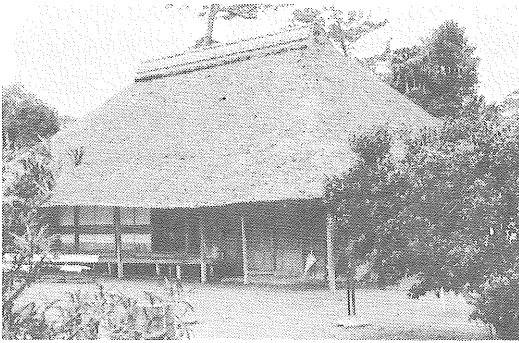


写真6 内出の伝統的草屋根民家(1985年5月撮影)

荷作業用倉庫，車輛を5台以上収容できる大規模な車庫を伴うものもある。松本の民家が1戸の草屋根民家をのぞくと全戸瓦葺きであるのに対して，芝では草屋根4戸，鉄筋2戸，内出では草屋根9戸，鉄筋4戸を含んでおり，舍利地区内部の地域差をうかがわせる。とくに，神善寺西部，および南部では，草屋根と鉄筋の民家が隣接しており，対照的である(第6図)。

屋敷地内の付属舎の中では，タバコ乾燥小屋が目につく。調査時点では，集落周辺の畑にタバコが作付けされていないにもかかわらず，タバコ乾燥小屋を1棟持つ家が13戸，2棟持つ家が4戸みられた(写真7)。土蔵造りのタバコ乾燥小屋以外にも，木造，あるいは大谷石を建築材料として用いたものがある。現在は，物置きや千両の出荷作業に利用されている。松本，芝に多く残存しており，内出にはほとんどみられない(第6図)。

舍利地区の集落景観は，古くからの社寺を中心に民家が配置され，生け垣が卓越し，さらに草屋根が



写真7 芝のタバコ乾燥小屋(1985年12月撮影)

残存するなど伝統的な性格を強く残している。しかし他方では，本造瓦葺き民家の存在，ブロック塀の普及，鉄筋コンクリート造りや御殿造りの家屋，大規模な作業舎など，近年の変化が著しいことを示唆する要素も混在している。

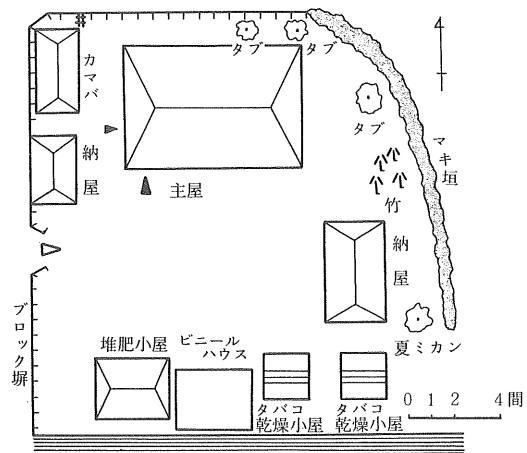
#### II-4 伝統的家屋景観

舍利地区に現在14戸存在する草屋根を持つ民家のうち，2戸を事例として伝統的家屋の屋敷地内の構成要素とその利用法について検討する。

事例農家Aは現在，水田1.2ha，ビニール水田25aを耕作し，千両40a，ピーマン25aを栽培している。このほかに，作付けしていない畑を30aほど所有している。家族構成は，世帯主(47歳)，妻(45歳)，母(67歳)，長男(20歳)，次男(16歳)，長女(13歳)の6人である<sup>14)</sup>。長男は波崎町農業協同組合に勤務しており，主に世帯主と妻が農業に従事している。

屋敷地には主屋のほかに，カマバと2棟の納屋，堆肥小屋，2棟のタバコ乾燥小屋が庭を中心に配置されている。中央の庭は，かつて収穫物の干場として利用されていた(第7図)。

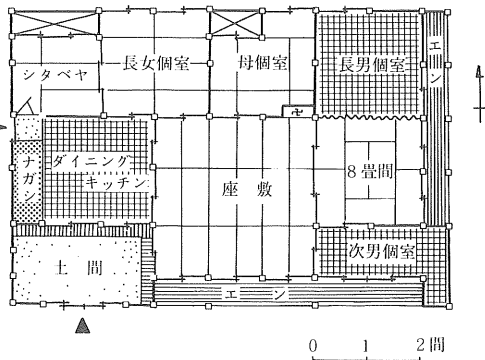
主屋は，130～150年以前に建築されたものと推定される。寄棟型屋根を持つ平入りの直屋(間口8間，奥行5.5間)で，屋根材料はカヤである。約20年前に舍利浜在住の「葺き師」が屋根を葺き替えて以来，保修は加えられていない。屋内については，1983年にそれまでの土間を板敷にしてダイニングキッチンとしたほか，長男，次男，長女の個室に改造を加え



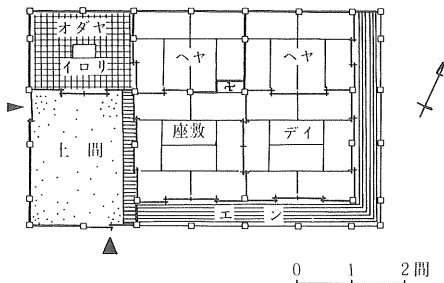
第7図 舍利地区における農家の宅地利用

て現況となった(第8-a図)

世帯主夫婦は、「シタベヤ」と呼ばれる4.5畳を寝室にしている<sup>15)</sup>。長女の個室になっている8畳間は、改造以前「ダイドコロ」と呼ばれ、板敷であった。中央にはイロリが切っており、食事はこの室で取った。イロリの上部には荒神様が祭られていた。世帯主の母の個室は、改造以前「ヘヤ」と呼ばれ、北側のガラス戸はなく、塗り籠めの暗い室であった。東側の長男の個室と8畳間、そして次男の個室は、合わせて「デイ」と呼ばれていた。長男の個室の東側には、改造以前まで床の間に設けられていた。18畳の座敷には、改造以前までイロリが切れ、「ネンプツ」などの村の寄り合いに利用された。仏壇の上方には神棚があり、天照皇大神宮、益田神社の御札が祭られている<sup>16)</sup>。土間は、縄や俵を編む作業場であったとともに、穀物や味噌などの貯蔵庫としても機能していた。改造以前まで「コクイレ」と呼ばれる10俵入りの木箱が3つ土間の西側に置かれ、粳のまま米が備蓄されていた。



a. 農家Aの主屋



b. 農家Bの主屋

第8図 舍利地区の民家の伝統的間取り

主屋の西には「カマバ」と呼ばれる瓦葺きの炊事舎がある。1970年まで「カマバ」で炊事をして、主屋の「ダイドコロ」で食事を取っていた。現在でも餅を搗く時には、「カマバ」で米を蒸す。また、ゴエモンプロと便所が「カマバ」の内部に併設されており、現在も利用されている。「カマバ」の北側に位置する井戸は、毎年7月7日のタナバタの時に掃除をして、塩で清める。「カマバ」の南に隣接している瓦葺き納屋は、ピーマンの選果作業に用いられる。堆肥小屋(間口3.5間、奥行2.5間)は、高さ約4mで、地上から1.5mまでは石造りである。この農家は1963年まで役牛を飼育しており、牛の下肥に糞と水を混ぜ合わせて堆肥を作っていた。

タバコ乾燥小屋は2棟あり、1940年と1964年に建てられた。黄色種のタバコの葉を乾燥させるための施設で、1棟につき16,200枚の葉を4昼夜かけて乾燥させた。毎年7月上旬から8月中旬まで、5~6回に分けて摘み取り、乾燥の作業を繰り返した。燃料は、第二次世界大戦前は薪であったものが戦後には石炭、さらに1965年以降になると重油が用いられた。1960年頃がタバコ生産の最盛期であり、1971年まで乾燥小屋は利用された。現在は物置きになっている。東側の瓦葺き納屋は、農機具収納庫である。

事例農家Bは、ピーマン30aを栽培するほか自給用の水田を耕作している。主屋の建築年代は1917年である。寄棟型屋根を持つカヤ葺き、平入り直屋である点は、事例農家Aの主屋と共通しているが、間取りは整形四間取りである。19世紀中期に建てられた事例農家Aの主屋と20世紀初頭に建てられた事例農家Bの主屋の間取りの差異は、舍利地区においてこの時期に間取りの変化が起きた可能性を示唆する事例とも解釈できるが、階層差による間取りの差異である可能性も残される<sup>17)</sup>。舍利地区では、座敷の畳数、床の有無、「コクイレ」の大きさが家格を象徴している、という聞き取りが得られた。

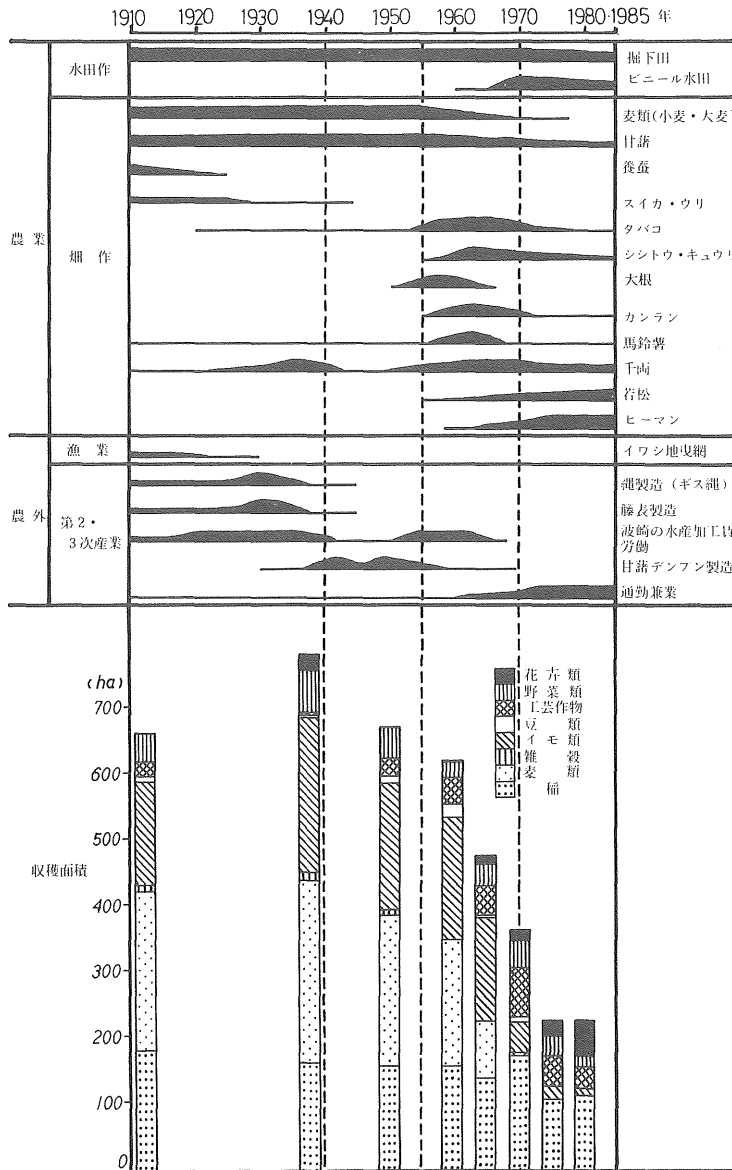
舍利地区の伝統的家屋景観に共通している特色は、(1)主屋がカヤ葺きの寄棟型屋根を持つ平入り直屋である点、(2)炊事舎である「カマバ」を主屋とは別棟にする点、(3)納屋、タバコ乾燥小屋、「カマバ」などの付属舎を干場中核方式に配置している点、(4)仏壇、神棚、トシガミサマを祭る位置、(5)寝室に万年床が敷いてある点などである。

### Ⅲ 経済活動の変遷と実態

#### Ⅲ-1 主要経済活動の変遷

鹿島郡東下村々是によると<sup>19)</sup>、明治末期の舎利地区の生業形態は、農業を主とし漁業を従とするものであり、そのほかに水産加工、籐表製造、製縄などの副業があった。その後の生業の変遷を既存の資

料と聞き取りに基づいて模式化したのが第9図である。最も主要な生業であった農業の内容(主として作物構成)と農外就業から時期を区分すると、1940年頃までの伝統的生業期、1940年代から1955年頃までの食糧増産期、そして1950年代後半から1970年頃までの園芸農業導入期、それ以降の園芸農業・通勤兼業期に分けることができよう。



第9図 舎利地区の就業変遷と作物別収穫面積  
(『波崎町史料Ⅰ』、農林業センサスおよび聞きとりによる)

### a. 伝統的生業期(1940年頃まで)

大正末期から昭和初期までの舎利地区の平均的農家は、40～50aほどの掘下田における水稲作と1ha程度の畑における甘藷と小麦の栽培を組み合わせていた。麦類のうち販売用の小麦の栽培面積が、自給用の大麦の5～6倍であった。そのほか30aほどの畑にスイカやマクワウリ、ラッカセイなどの換金作物が栽培されていた。養蚕は大正期に入りしだいに衰退し、昭和初期にはごくわずかにみられるにすぎなかった。掘下田は完全な天水田であったため<sup>20)</sup>、旱害ばかりでなく雨の多い年には排水不良による被害をうけた。そのため生産性は低く、10a当りの水稲収量は240～270kgにとどまっていた。当時は1戸当りの家族数が多かったこともあって、一般の農家の掘下田では米の自給が困難であった<sup>21)</sup>。

1935年頃には4月下旬に水稲の播種が行われ、6月中旬に田植、そして10月上旬から下旬にかけて収穫された。畑では11月下旬から12月初旬にかけて麦類が播種され、5月中旬から下旬にかけて大麦、5月下旬から6月中旬にかけて小麦の収穫が行われた。甘藷の場合は、5月中旬にその種蔓が麦類の畝間に植えられ、11月上旬から下旬に収穫された。

1935年頃から舎利地区に普及したものととして、千両とタバコがある。明治末に房州から導入された千両は、この頃にはどの農家でも10～20a程度栽培するようになっていた。正月用の切り花として、主として東京市場に出荷された。1943年の波崎花卉出荷組合記録によると、千両は等級により1本10銭から4銭までの価格で販売された。最も盛りの畑では10a当り2万本ほどを出荷することができたということから<sup>22)</sup>、おそらく800～1000円の販売額になったと考えられる。3～4年に1度の葎簀困いの費用として300～400円必要であることや冷害や風害を受けやすく、毎年収穫できないとしても、現金収入の少なかった当時では重要な収入源であった。

他方、タバコ栽培も貴重な現金収入をもたらすものであった。内出では在来種の水府タバコが栽培されたが、松本と芝には1930年頃黄色種が導入された。黄色種は水はけの良い砂質土壌と温暖な気候に恵まれた舎利地区に適しており、その後栽培が拡大した。1935年には鹿島タバコ耕作組合が結成され、鹿島・行方両郡でタバコの耕作・乾燥技術の普及が行なわれた。この頃、10a当り300円前後の粗収入がタバ

コ栽培から得ることができた。これは当時の甘藷の粗収益の6～10倍であった。

11月下旬に畑作業が一段落すると、翌年3月まで多くの農民が波崎地区のイワシのしめ粕製造工場へ賃労働に出かけた。また、しめ粕製造の際の煮汁はくさらせて良質な肥料として使用できたため、これと米や薪が交換され、牛車で運ばれた。この当時から耕耘機が普及する1960年頃まで、朝鮮系の赤牛を役畜として飼育する農家が多かった。昭和初期から第二次世界大戦開始頃まで、舎利地区では山林を切り開き畑地が拡大されたが、その際にイワシの煮汁は重要な肥料となった。

このほかの農民の副業として、製縄業と籐表製造があった。1910年代までカヤ葎屋根用のカヤ縄が主に生産されていたが、1920年代に入って、銚子の漁民が使用するギス(ホウボウ)漁の縄製造に変わった。農家では稲ワラを打ち、手でワラをなつた。舎利地区には1935年頃には2軒の縄屋があり、縄屋はそれぞれの農家から購入した細い縄を合せて機械でよりをかけ、出荷した。1貫目の縄が8～10銭で、1日の収入が30～40銭程度になった。他方、下駄用籐表の製造は明治末期に波崎地区の漁家の婦女子や出征軍人の遺族の副業として始まったもので、しだいに周辺町村へ拡大した。舎利地区には1920年代後半から1930年代半ばにかけて、4軒の製造所が存在した。12歳から20歳頃までの女性が主に雇われた。

漁業は大正期に入ると衰退傾向になるが、それでも舎利地区では3統の地曳網が1930年頃まで存続していた。松本、芝、内出に1統ずつあり、それぞれ2～3人の資産家が共同で経営していた。海岸にそれぞれの網の小屋が設けられてあり、田植が終ると操業が始まった。見張の独特な呼声で集落民は浜に集まった。一統におよそ40～50人の労働力が必要で、地曳網の末期には人手不足で芝網と松本網が共同操業することもあった。

以上のように、昭和初期までの舎利地区の生業は、米麦甘藷生産を中心に、小規模な換金作物生産と漁業、そして冬季の副業や賃労働を組み合わせるものであった。

### b. 食糧増産期(1940年頃～1955年頃)

1940年頃から戦時下の食糧事情の悪化の影響と徴兵に伴う労働力不足により、舎利地区の換金作物生産と農外就業が後退していった。千両は旧波崎町で

1938年には栽培面積が40haであったものが、1943年には20haに減少し、1945年には7haになってしまった。舍利地区では実質的に千両栽培は消滅してしまっ。タバコ栽培も1940年頃から後退し、漁業およびその他の賃労働も行われなくなった。専ら掘下田での水稲作と畑での麦と甘藷、そして自家用野菜の栽培に限られるようになった。1930年代前半の山林閉墾の結果、旧波崎町全体で約100haの畑地が増加した。舍利地区でも甘藷と麦類の生産が拡大した。1940年頃には舍利地区に3つのデンプン加工場があり、芝と内出のものは7~8人の共同作業によるもので、芝のものは個人経営のものであった。統制経済の下で、ヤミの農産物販売が盛んな時期であった。

### c. 園芸農業導入期(1955年頃~1970年頃)

食糧事情が緩和されてきた1955年頃から、さまざまな商品作物生産が試みられるようになった。この頃には道路整備が進み、東京市場へのトラック出荷が容易となってきた。早掘馬鈴薯、大根、シシトウ、カンラン、キュウリなどの栽培が始められた。タバコ栽培は、1955年頃から復活し、1960年代には最盛期を迎えた。特に芝と松本ではほとんどの農家が50~60aのタバコを栽培し、これが収入の第1位を占めていた。他方では千両に力を注ぐ農家もあり、朝鮮動乱時の好況や高度経済成長期における生活水準の上昇などを契機に、生産が大きく伸びた。10~20aの栽培面積の農家が多かったが、価格の良い年には千両からの収入が第1位となった。1955年頃から葎の代りに割竹でガクヤを作る農家が増加し、さらに1960年代後半からはガクヤを支える支柱に鉄パイプを用いるようになった。若松が千両とともに正月用切花として栽培されるようになったのは、1960年頃である。以前から松林の中で天然の松の苗木や枝が採取され出荷されていたが、プロパンガスの普

及で燃料としての松の需要が減少し、松林の管理が悪くなり、良好な松苗が得にくくなった。これが若松栽培の直接の契機であった。収益性の高い商品作物を求めて模索していたのがこの時期であった。

他方、伝統的な畑作物である甘藷と麦類は、その収益性の低さから後退し始めた。1950年代後半にはデンプン需要が激減し、甘藷栽培が後退した。麦類の衰退は輸入麦類の競合による価格の低下とともに、夏作物として導入された種々の換金作物と栽培期間が一部重なりあうようになったことによってひきおこされた。この結果、舍利地区の土地利用率は1960年には1.45であったものが、1970年には0.99になってしまった(第1表)。畑地や山林の一部は、1965年頃から1970年頃にかけてビニール水田に転換された。ビニール水田は掘下田と比較して水管理を含む農作業が簡単で、生産力も高かった。10a当り収量は480~600kgに達し、掘下田よりも120~180kg程度の増収になった。

この当時は農外就業機会は限られており、1960年の101の農家の77%にあたる78戸までが専業農家であった。残りの23戸の兼業農家のうち、9戸が自営業、14戸が通勤兼業に従事していた。

### d. 園芸農業・通勤兼業期(1970年以降)

波崎町でピーマンが最初に栽培されたのは須田地区においてであり、1947年頃のことであった。舍利地区ではピーマンの導入がおくれ、1975年頃によく大部分の農家に普及した。ピーマンの施設園芸は現在ではこの地区の農業の中心的存在になり、反面、タバコ栽培は消滅してしまっ。

千両栽培は高度経済成長期以降の経済の低迷や近年の冷害と風害によって栽培戸数の減少が著しい。しかし、1戸で4~10haにおよぶ専門的企業経営が発達し、中には3億円以上の販売額をあげる農家も存在するようになった。一般の千両栽培農家の経営

第1表 波崎町舍利地区における専業業別農家数

年	農 家 数 (戸)				兼 業 農 家 (戸)			平均経営 耕地面積(a)	土地利用 率
	合計	専業	第一種兼業	第二種兼業	自営	通勤	日雇・出稼		
1968	101	78	11	12	9	14	—	125.6	1.45
1970	90	46	23	21	14	26	4	133.8	0.99
1975	85	14	42	29	11	29	31	119.7	0.79
1980	87	28	36	23	8	42	9	134.8	0.68

(農林業センサスによる)

規模は20～40a程度で、地区内あるいは近辺の専門的経営農家に収穫時に畑単位で売却するが多い。最近の千両の栽培面積の減少を補うように、若松の栽培面積が増加しつつある。水稻と甘藷は依然として減少傾向であり、麦類の栽培は消滅してしまった。

この時期の舎利地区における生業に著しい影響を与えたのは1969年の鹿島臨海工業地帯の操業開始であり、雇用機会の増加に伴って若年層を中心に通勤兼業者が急増した。1970年から1975年間に舎利地区の専業農家率は51%から16.5%に減少してしまった。通勤兼業の増加とともに土木工事の雇人が急増した。鹿島臨海工業地帯の開発はまた、その補助事業を通じて、さらにこの地区の生業や景観を大きく変えようとしている。この時期の農業経営と就業構造については、以下でさらに検討することにしよう。

### Ⅲ-2 現在の農業経営活動の実態

#### a. 農業経営の概要

1983年茨城県農業基本調査によると、舎利地区には77戸の農家があり、これは全戸数の約40%にあたる。このうち、専業農家は26戸、兼業農家は51戸を数えた。1戸当りの平均収穫面積が127a、兼業農家のそれは86aであった。過去1年間に150日以上農業に従事した者は145人で、40～50歳代の世帯主夫婦が中心の働き手である。また、経営耕地規模別に農家数をみると(第2表)、1.0ha以上2.0ha未満の農家が33戸で最も多く、2.0ha未満の農家は合計63戸で全体の81.8%を占めている。

舎利地区の農家に最も普及している農用機械は、10馬力未満の動力耕耘機で、全体の8割強にあたる62戸が所有する。以下、全体の3分の1以上の農家に普及している機械装備は、動力噴霧防除機(58戸)、農用トラック(49戸)、動力脱穀機(42戸)、動力刈取機(40戸)、米麦用乾燥機(39戸)、動力田植機(35戸)、

動力散粉防除機(29戸)である。

1983年の舎利地区の経営耕地面積は11,285aで、このうち、田が5,265a、畑が5,975a、樹園地が45aである。総収穫面積は7,710.3aであるから、土地利用率は68.3%となり、非常に低い。作物別に収穫面積をみると(第2表)、イネが全体の48%にあたる3,727aと最も広く、続いて千両と若松を合わせた切花類が1,408a(18%)、ピーマン等の施設園芸作物が1,145.3a(15%)<sup>23)</sup>を占める。この稲、千両、若松、ピーマンが現在の舎利地区の主要作物である。かつて重要であった落花生、その他タバコ等の工芸作物、ピーマン以外の野菜類、あるいは豆類、イモ類の収穫面積は、それぞれ、481a、237a、185a、372a、150aにすぎない。

#### b. 主要農業部門の活動

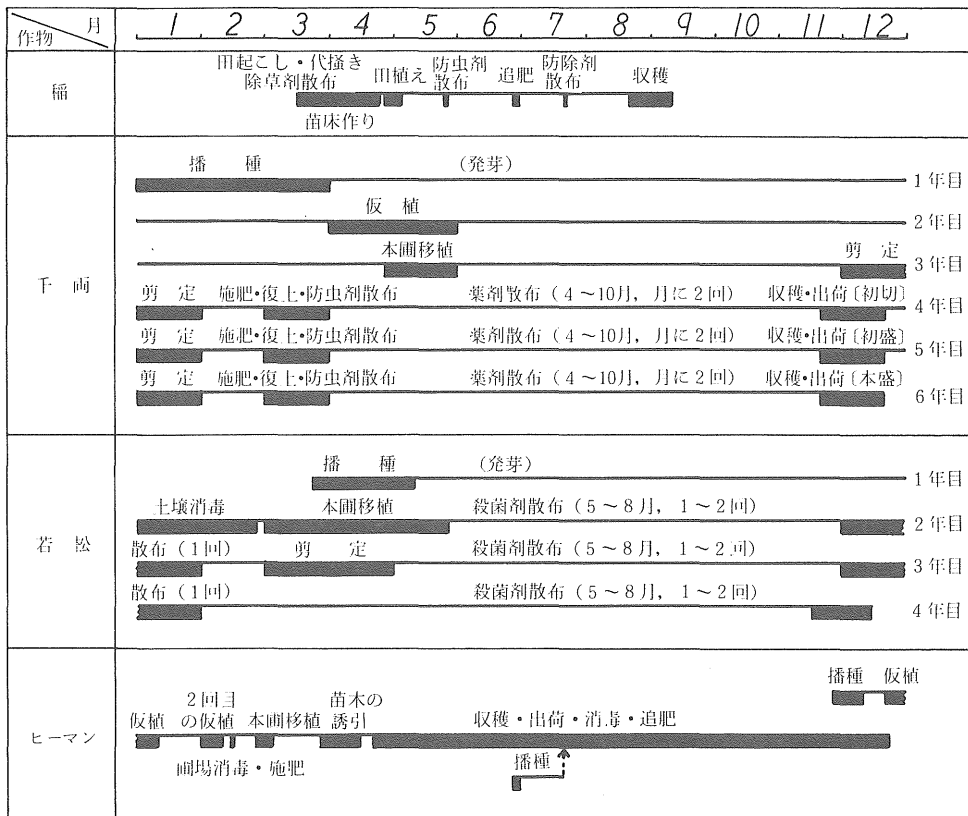
**稲作** すでに述べたように、舎利地区の稲作は主に掘下田で行われる。その作業暦の一例を示すことにしよう(第10図)。まず、3月中旬から4月上旬にかけて、種の消毒・浸水・陰干し、播種、灌水が行われる。圃場では、3月下旬から4月上旬にかけて、田起こし、代掻き、除草剤散布が順に行われる。施肥は田起こしと同時に行為れ、「クロマンガ」(Mn<sub>3</sub>O<sub>4</sub>)<sup>24)</sup>を少量混ぜた配合肥料が10a当り60～70kg投入される。田植えを行うのは4月末から5月初めで、機械化以前は1人で1aの田植えをするのに、2時間を要したが、現在では機械を使うので、同量の仕事が20分程度で済んでしまう。

舎利地区における稲作の最大の難点は、砂質土壌を平均的な地下水位まで掘下げた田の灌排水不良である。排水路はあっても地区全体で組織的に整理されていないので、大雨直後には容易に水が引かず、掘下田は池のような景観を呈する。逆に日照りが続き、地下水位が低下してしまうと、ポンプでいくらか水を汲み上げて灌水しても、水が砂質土壌を通り抜けてしまい、効果がない。この渇水時には、降水を

第2表 舎利地区の経営耕地規模別農家数と作物別収穫面積

区 域	経営耕地規模 (ha) 別農家数 (戸)					作物別収穫面積 (a)								
	総数	0.5未満	0.5～1.0	1.0～2.0	2.0～3.0	3.0以上	総計	稲	切花	ピーマン	工芸作物	豆類	イモ類	その他
内 出	35	5	11	15	1	3	2933.3	1418	635	255	265	215	83	65.3
松 本	27	1	7	12	4	3	3324	1545	648	478	380	107	17	150
芝	15	2	4	6	2	1	1453	764	125	337	73	50	50	54
舎利地区全体	77	8	22	33	7	7	7710.3	3727	1408	1070	718	372	150	265.3

(1983年茨城県農業基本調査による)



\* 黒い部分は定期的な作業の主な時期を示す。

第10図 舍利地区における主要作物の栽培暦  
(1985年、聞きとりによる)

待ち望む他に打開策はない。保水性と栄養分保持に優れるビニール水田が、1970年頃、一部に導入されたが、折りからの米の生産調整政策の実施により一般に普及するまでにはいたらなかった。舍利地区の稲作は、この意味で、自然の水利に左右される弱点を持つ。

稲刈りは、8月下旬から9月初旬に機械で行なわれる。初星、トドロキワセ等の早生種は8月20日頃、大空、トヨニシキ等の中生種は9月1日頃、コシヒカリ、日本晴等の晩生種は9月10日頃が収穫期である。舍利地区では、上記の品種の中で、良質良食味の太空やコシヒカリが現在多く栽培されている。舍利地区における現在の10a当りの稲収穫量は360~420kgで、茨城県平均(1984年)の487kgに比べると高いとはいえない。また、農家1戸当りの稲平均収穫面積も約50aにすぎない。舍利地区の農家全77戸

のうち74戸が稲作を行なっているが、そのほとんどは自給目的である。

**千両栽培** 波崎町が千両の栽培に適しているのは、冬の温暖な気候条件が1つの理由である<sup>25)</sup>。また、砂質土壌のため、葉が小さく締まりのよい千両ができるのだと言う。波崎町の約200戸の栽培農家が組織する波崎町千両組合は、千両の立枯れ病、実落ち症等の病害対策立案、金属パイプ・出荷用ダンボール箱・農薬等の共同購入、税金対策立案、花卉市場のセリ日の折衝などを行なう<sup>26)</sup>。1985年5月の聞き取りによると、年間の組合費は、1人当たり100円と栽培面積10a当り200円の2つの基準で徴収される。

千両の播種は、1月から3月に行なわれることが多い(第10図)。発芽はその年の6月であり、翌2年目の4月から5月にかけて、5cm程の高さになっ

た苗木を10cm四方の間隔で別の苗床に仮植(「シロウエ」)する。3年目の4月末から5月には、うね間60cm、株間30cmの間隔で、高さ15cm程の幼木を本圃に移植する。この段階で、千両の株数は10a当り4,500~5,500になる。1株には普通2本、時には3、4本の成木が生える。千両は病気に弱いため、薬剤散布が4月から10月にかけて月2回ずつ行われる<sup>27)</sup>。

千両が最初に収穫されるのは、播種して4年目の11月下旬から12月中旬である。これを初切(ハツギリ)あるいは鎌付けと言う。5年目の収穫は初盛(ハツザカエ)、6年目の収穫は本盛(ホンザカエ)と呼ばれる。収穫量は、初切を1とすると初盛が5、本盛が4である。本盛を終えた千両の株は、再び収穫する場合でも、通常は2年間休ませて収穫されることがない。

千両の栽培自体は、普通、1年10a当り延べ50人程の労働力があれば足り、あまり人手がかからない。しかし、収穫・出荷期には多くの雇用労働力が必要で、主に佐原、小見川、東庄、銚子の野菜栽培農家、あるいは波崎町内のピーマン栽培農家の農閑期にある婦人が雇われる。千両の市が最も盛んに立つのは12月15日頃で、20日頃まで全国各地で市が立つ。波崎町の千両は、全国市場の70~80%を支配している。

千両は台風や寒波による被害や病害を受けやすい収穫不安定な作物であり、聞きとりによると粗収入は10a当り0~500万円 で年較差が極めて大きい。さらに、ガクヤや出荷場などの設備、雇用労働力のための費用が出荷農家では必要になり、10aあたり平均粗収入140~150万円からその経費を差し引くと、純益は10a当り50~100万円になる。収入の年による変動が大きいこと、多額の設備投資と人件費が必要なこと、そして花卉市場では古くからの縁故関係が不可欠なことにより<sup>28)</sup>、1970年頃から、少なくとも舎利地区では、千両栽培農家が大規模と小規模の2種に分化してきた。大規模経営は千両の栽培から出荷まですべてを一貫して行うもので、舎利地区では、6戸の農家がこれに該当する。これに対し、小規模経営農家は、大規模経営農家からの委託栽培か、仲買人に成木を圃場単位で(「ヤマごと」)売る栽培形態をとり、出荷には直接関与しない。

**若松栽培** 若松は、正月の生花用黒松(「花松」)で、千両と同じ土地で交互に栽培されることが多い。

千両よりも丈夫で費用のかからない若松の栽培は、千両とはほぼ同じ程度の年平均純益が比較的安定して得られるため、切花栽培農家において千両栽培による不安定な収入を補っている。

若松は、3月の彼岸頃から5月上旬に播種され、入梅の6月半ばに発芽する(第10図)。2年目の3月には、10a当り8~10万本の苗木が本圃に移植される。収穫・出荷は、播種から4年目の11月中旬から12月初旬に行われ、10a当り約5万本が製品になる。出荷される若松の高さは約120cmで、上部60cm程は青葉を付けたままにし、下部60cm程は古葉を取り去って足の部分とする。葉が短かく、丈の長さや幹の太さのバランスのよい若松が上等とされる。出荷時期は千両より7~10日程早く、セリ市の最盛期は12月8日頃である。出荷期には10a当り約100人の労働力が必要となる<sup>29)</sup>。

**ピーマン栽培** 舎利地区のピーマンは、無加温ビニールハウスで栽培される<sup>30)</sup>。品種としては、中型・球型の土佐グリーンBが最も多く栽培され、少し長めで実の太りの早いニューエース、結実率の高い新さがけ2号・6号も主力種である。聞き取りによると1年に10a当り100万円ほどの経費が必要で、純益は1年に10a当り約150万円になる。

ピーマンの播種は、11月末から12月初旬に行われる(第10図)。温床にまかれた種の発芽は約7日後で、12月下旬から翌年1月初旬に、苗が播種床から別の温床へ仮植される。2月中旬には2度目の仮植がなされる。この作業に並行して、圃場では、定植10日前までに施肥、定植1週間前までに土壌消毒を行う。定植は2月末から3月初めに行われ、3月末から4月中旬には、倒伏を防ぐために茎や枝をビニールのヒモで釣り下げる。ピーマン栽培は大量の肥料<sup>31)</sup>を必要とし、その経費は舎利地区で1年10a当り約40万円に及ぶ。これは、舎利地区の土地がやせているためであるが、逆に、砂質土壌であることが大量施肥を可能にしている。つまり、舎利地区では、ピーマンが、他所のように大量施肥による栄養過多でかえって衰弱するということがない。

収穫は4月20日頃から8月末まで行われる。一部は7月20日頃、6月末に播種した新しい苗に植え代えられ、9月から12月の降霜時まで収穫される。収穫期中は、7~10日に1度、土壌消毒をし、実が固くなくなったり色の薄くなった時に灌水と水溶性無機肥



料が施される。収穫期が長いいため、ピーマンは収量が多く、10a 当り約14t に達する。ただ、10～20年の連作で土壌の肥沃度が極端に低下し、収量の減少した土地も最近見られる<sup>32)</sup>。

ピーマンの出荷は、波崎町農業協同組合を通しての出荷と、10～20人で構成する任意組合による自由出荷の2種類がある。舎利地区には、三共園芸組合と波崎第一組合の2つの任意組合がある。出荷量は、農協出荷7に対し自由出荷3の割合である。農協出荷の場合、前日から収穫したピーマンを当日の午前10時までに農協集出荷場へ運び、ビニール袋詰めにして午後5～6時にトラックで出荷する。自由出荷の場合、午前中に収穫したピーマンを午後ビニール袋詰めにして集出荷場へ運び、午後5時頃にトラック出荷する。出荷先は、どちらも京浜あるいは東北地方である。

### c. 舎利地区における農業経営類型

舎利地区の農業経営類型を主要作物から分類すると、「稲単作」、「稲＋伝統的畑作物」、「稲＋切花」、「稲＋ピーマン」の4類型に分かれる。また、就業状況の点から、専業、恒常的勤務兼業、自営業兼業、臨時雇われ兼業の4類型が見いだされる。この作物型と就業型の対応が第3表に示されている。

「稲単作」型農家は6戸あるが、すべて恒常的勤務兼業農家である。平均収穫面積は36aで、4作物型の中で最も狭い。

「稲＋伝統的畑作物」型農家は15戸ある。伝統的畑作物には落花生、甘藷、馬鈴薯、豆類などが含まれる。この15戸のうち、専業農家は3戸だけで、その平均収穫面積は162aと、舎利地区専業農家全体の平均値より高い。これは、伝統的畑作物が、切花やピーマンに比べて粗放的に栽培され、単位面積あたりの収益が低いためである。残りの12戸の兼業農

家の平均収穫面積は74aである。

「稲＋切花」型農家は14戸あり、平均収穫面積は213aで、4作物型中最大である。この作物型では、就業型による収穫面積の有意な差異は見られない。切花の平均収穫面積は約100aであり、純益は少なめに見積って1年に10a当り50万円とすると、1戸当りの切花栽培による純益は1年に最低でも平均500万円にはなる。収穫・出荷期も含めて、切花栽培に必要な労働力は、多めに見積もっても1年10a当り延べ150人である。

「稲＋ピーマン」型農家には42戸が該当し、全農家の54.5%を占める。42戸の中では、恒常的勤務兼業農家の24戸が最も多く、専業農家の15戸がこれに次ぐ。専業農家15戸の平均収穫面積は84aで、恒常的勤務兼業農家24戸の平均収穫面積67aよりは大きい。「稲＋伝統的畑作物」や「稲＋切花」型の専業農家に比べて著しく小規模である。この作物型農家全戸の平均収穫面積は73aであり、4作物型中、「稲＋単作」に次いで小さな農業経営規模を示す。主要作物ピーマンの平均収穫面積は21.6aで、純益は1年10a当り約150万円であるから、この作物型農家におけるピーマン栽培による1戸当りの純益は、10a当り年間約324万円となる。ピーマン栽培に必要な労働力は、収穫・出荷期だけで少なめに見積っても10a当り延べ240人以上であり、家族労働力にはほぼ全面的に依存している現在、少なくとも労力の点で、収穫面積を現在以上にして切花程度にすることは困難である。舎利地区の農家全77戸の平均収穫面積101aを基準とし、収益や労力も考慮すると、「稲＋ピーマン」型農家は、相対的に小規模で労働集約的な収益性の高い農業経営を行っているといえる。これに対し、「稲＋切花」型農家は、相対的に大規模で資本集約的な収益性の高い農業経営を

第3表 舎利地区における農家の作物型と就業型の対応

(戸)

作物型 \ 就業型	兼業				合計
	農業専業	恒常的勤務	自営業	臨時雇	
稲単作	0	6	0	0	6
稲＋伝統的畑作物	3	9	2	1	15
稲＋切花	8	4	1	1	14
稲＋ピーマン	15	24	2	1	42
合計	26	43	5	3	77

(1983年茨城県農業基本調査および聞きとりによる)

行っているといえるだろう。舍利地区の農業経営を代表するのは、この「稲+ピーマン」と「稲+切花」の2つの農業経営類型である。

### Ⅲ-3 現在の就業構造～芝の事例～

次に、1985年5月の聞きとり調査により得た芝の就業状況を事例として分析し、舍利地区の現在の就業状況を検討しよう。

芝の全41世帯のうち、農家は16戸、非農家は25戸である(第4表)。16戸の農家の中で、15戸は恒常的勤務兼業農家であり、専業農家は1戸にすぎない。2世代にわたって農業を営む世帯は6戸だけで、あとは世帯主世代あるいはその前世代の1世代のみが農業に従事する。また、60・70歳代の世帯主夫婦が共に農業を営む農家3戸が、稲、馬鈴薯、千両を主要作物とするのに対し、それ以外の比較的若い年齢の農業者がいる世帯13戸は、前述の3作物より新しい商品作物であるピーマンを主要作物としている。非農家25戸の中では、恒常的勤務世帯が16戸を占め、「恒常的勤務+自営業」世帯は4戸、自営業世帯は4戸、臨時的勤務世帯は1戸である。恒常的勤務世帯は、臨時的勤務世帯を除く他の非農家や農家に比べて世帯主夫婦の共働きが少なく、また、次世代の就業はいずれも恒常的勤務である。

恒常的勤務によって収入を得る世帯は全戸の85.4%にあたる35戸にも及び、全体的に恒常的勤務所得への依存が高い。恒常的勤務者は、農業者35人よりも多い52人で、40・50歳代が中心の農業者に対し、20～40歳代を中心として年齢層が若い。52人の

恒常的勤務先は、年齢層によって異なる(第11図)。10・20歳代は、6割以上が鹿島臨海工業地帯の企業に勤めている。30歳代以上は、波崎町内や銚子市の伝統的な職場に勤める者が多い。波崎町内では、町役場、小学校、幼稚園、病院、農協など公共性の強い職場に勤務する者が25人中19人で、75%以上を占める。銚子市の職場としては、市役所、小学校、醤油会社、タクシー会社、鉄工所などがある。18人いる女性の恒常的勤務者のうち、2人を除けば、すべて勤務先は波崎町内か銚子市である。

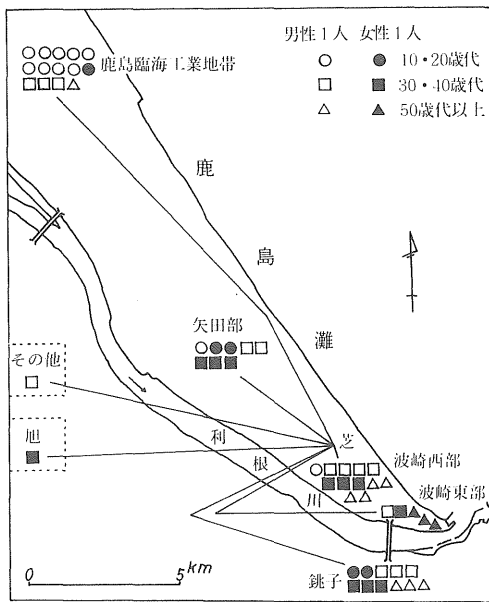
元来、舍利地区においては自給的農業だけでは生活が困難で、商品作物の導入や各種の副業、水産加工日雇などによる現金収入に依存する傾向があった<sup>33)</sup>。これはまた、波崎東部や銚子といった通勤可能な勤め先を提供する場が舍利地区の近くにあったためでもある。しかし、非農家が農家より多く、恒常的勤務所得への依存が高いという現在の就業状況は、決して昔からのものではない。総戸数増加に対する農家数の減少が著しくなり、舍利地区における農業の経済的地位が総体的に低下したのは、1970年頃のことである(第5表)。この頃、鹿島臨海工業地帯の操業が始まり、舍利地区から通勤可能な新しい恒常的勤務先が多くできた。同時に、農業においては、ピーマン栽培が本格化し、切花栽培農家の二極分化が起こり、現在に至っている。

舍利地区の多数の農家の生活を支えているのは、恒常的勤務による所得であり、主要作物としてのピーマンである。収益性の高いピーマン栽培が安定している限り、農業は現状のまま存続し、就業状況

第4表 舍利地区芝における就業世帯類型(全41戸)

世帯類型		前世代	世帯主世代	次世代	該当戸数
農家	専業農家	農業	農業		1
	兼業農業		農業	農業+恒常的勤務	2
			農業	恒常的勤務	9
			農業	恒常的勤務	2
		農業+恒常的勤務		2	
非農家	臨時的勤務世帯		臨時的雇われ		1
	恒常的勤務世帯		恒常的勤務	恒常的勤務	8
			恒常的勤務		8
	「恒常的勤務+自営業」世帯				4
自営業世帯				4	

(1985年、聞きとりによる)



第11図 舎利地区芝住民の恒常的勤務先  
(1985年、聞き取りによる)

第5表 舎利地区の総戸数と農家数の変化(戸)

区域	年次		
	1960年	1970年	1980年
内出	51 (44)	63 (39)	74 (37)
松本	35 (34)	51 (30)	65 (28)
芝	29 (23)	32 (21)	39 (21)
舎利地区全体	115 (101)	146 (90)	178 (86)

(世界農林業センサスによる)

左側が総戸数, ( )内が農家数を示す。

はほとんど変化しないだろう。しかし、ピーマンの次の有力な商品作物の導入の時機と方法によっては、恒常的勤務所得への依存がいよいよ高まり、あるいは脱農化が進むかもしれない。

#### IV 社会・行政組織

##### IV-1. 行政組織とその機能

波崎町における行政の最小単位は区である。調査地域である芝・松本・内出の3区には、それぞれ役員として、区長・区長代理・会計が一人ずつ置かれている。これらの役員は、一年交代を原則に輪番制

で選出される。区内の全世帯が参加する総会は、年一回開催され、その期日は、芝が1月6日、内出と松本が1月15日である。総会では、前年度の区費の決算報告や、今年度の区費・役員に関する決議、区の年中行事計画などが討議される。また、農業についての情報交換やお互いの親睦を深めるのもこの席においてである。

芝・内出・松本の3区が共同で1985年5月に舎利農村集落センターを建設したため<sup>34)</sup>、総会などの行事は今後ここを利用して行われるようになるが、これまでは舎利地区のどの区もこのような施設をもたなかったため、総会は1月の二十三夜講の際に、その当番の家で行なわれていた。

1月の他、5月と9月にも行なわれていた二十三夜講は、1970年頃からなくなってしまったため、その後農村集落センターができるまでは、輪番制で総会のための会場を決めていた。現在、農村集落センターは、区長に使用願を提出し、若干の使用料を支払うだけで利用でき、区の会合のみならず、老人会や子供会などにも広く利用されている。

行政組織である区と、それぞれの世帯を結びつけるのが班である。舎利地区では、1つの班が10戸程度のまとまりで、班が区内を分割する地域単位となっている。例えば、芝は1班(18戸)、2班(13戸)、3班(10戸)から成り、それぞれの班は地縁的なまとまりをみせている。班には、輪番制で選出される班長がそれぞれ1名ずつ置かれており、区会などの連絡は、区長から班長、そして各世帯へと伝達されている。主な班の仕事には、回覧板回し、選挙の入場券配布、国勢調査・農業基本調査等の調査票の配布と回収などがある。

舎利地区の消防組織は、芝・松本・舎利浜で組織する第一分団と、内出・伸舎利で組織する第二分団の2つから構成され、それぞれの分団が1台ずつ消防自動車を所有している。また、この地区は、波崎町立西小学校と波崎第一中学校の学区に入る。

このような行政組織を基本単位に行われる、舎利地区の集団的な活動には、婦人会・講・獅子舞・道普請などがある。婦人会や太子講・念仏講・同行講といった講組織は、それぞれ区単位で活動している。婦人会では、料理の講習会や運動会、あるいは旅行などを企画運営することによって、婦人間のお互いの親睦をはかっている。また、聖徳太子を拝む太子

講は、1月・5月・9月の年3回、60～70代の女性を中心に行われる。同様に念仏講も、60歳以上の女性を中心で、毎月21日に集まって念仏を唱えている<sup>35)</sup>。さらに同行講は、伊勢参りなど、同年輩の仲間と一緒に旅行する旅行同行者の集りである。芝の例では、40代・50代・60代の人々がそれぞれつくる3つの同行講があり、とりわけ40代と50代の同行講は、夫婦で旅行に出掛けるなど、近年とみに活発に活動している。

一方、かつては盛んであったが、第二次世界大戦以降急速に衰退してしまったものに、前述の二十三夜講や日待ち講、虫供養、青年会などがある。また、若妻の集りである子安講は、以前は年に1・2回、銚子の飯沼観音に御参りをしたり、お互いに育児に関する情報交換を行なうなど意欲的に活動していたが、近年著しく衰退し、芝では1975年頃から子安講がみられなくなってしまった。

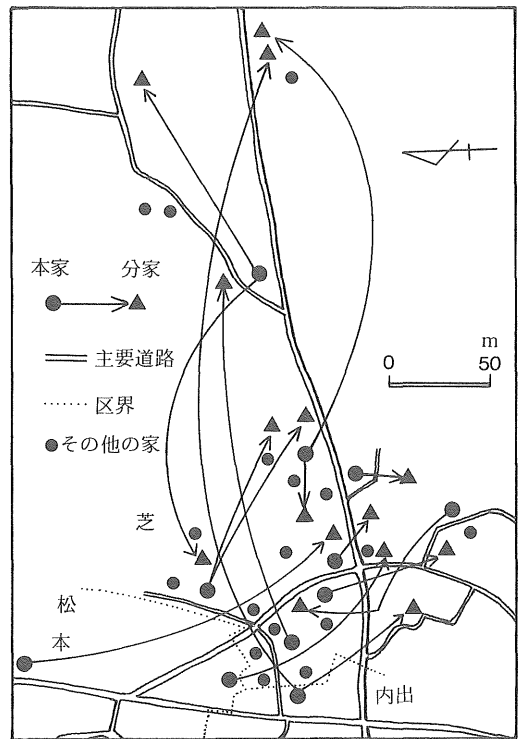
県指定文化財である獅子舞は、2月1日と9月1日の年2回、鳴物保存会の企画運営により、3区共同で行われており、あわせて後継者の育成もはかられている。獅子舞は、益田神社と八幡神社で舞を納めた後、区長の家で踊りを奉納する。また、道普請は、8月の第1日曜日を目安に3区一斉に実施される。それぞれの区の範囲内が清掃分担区域で、午前6時頃集合して草刈りを始め、午前8時頃までに終わらせている。

このように、地縁的な行政組織が果たす役割は、住民の日常生活における表面的で形式的な活動に限定されており、冠婚葬祭などのより実質的なつきあいにおいては、むしろ同族集団の影響の方が強いものと考えられる。そこで、このような同族集団の果たす役割を次に考察してみよう。

#### IV-2. 同族集団の分布と機能

##### a. 同族集団の分布

舍利地区では、野中(34戸)、岡野(29戸)、溝口(28戸)、田向(18戸)、山口(13戸)、堀口(7戸)姓が圧倒的に多く、これら6姓が全世帯の約70%を占めている。第12図は、芝における本-分家関係を示したものである。これによると、芝の全世帯(41戸)の約60%にあたる26戸が、家の系譜関係による本-分家関係で結びついており、芝という地縁的な結合関係のうえに、さらに血縁的な結合関係が重層的に重な



第12図 舍利地区芝における本-分家関係  
(1985年、聞きとりによる)

りあっている特徴が伺える。一般に、本家は集落の中央部に、分家は集落の外縁部に位置する様子が見とれる。

舍利地区では、家の本-分家関係をもとに父系の系譜関係で結びつく同族集団を「仲間」と呼んでいる<sup>36)</sup>。ここには「野中仲間」「溝口仲間」「岡野仲間」「山口仲間」「田向仲間」「堀口仲間」の6つの同族集団が存在しており、それぞれの仲間は、古い時代に分かれた家を本家として、さらにいくつかのより小さな集団に分かれている<sup>37)</sup>(第13図参照)。日常生活で実質的な役割を果たすのは、より小さな仲間組織の方である。

例えば、野中仲間の場合には、本家の屋号により、さらに「宇兵衛仲間」「新兵衛仲間」「与五兵衛仲間」「権左衛門仲間」の4つに細分される。同様に、岡野仲間は4つ、溝口・山口・田向仲間はそれぞれ2つに細分されるため、6つの同族集団は、実質的にはさらに下位の15の仲間組織に分割されることになる。これらの分布と本家の位置を示したものが、



第13図 舍利地区における同族集団の分布  
(1985年、聞きとりによる)

第13図である。

仲間の分布をみると、野中仲間は内出、溝口仲間は内出と芝、田向仲間は芝、岡野・山口・堀口仲間は松本といった具合に、仲間により分布が異なっている。また、一般に同じ仲間の構成員は、それぞれの本家を中心に、その周囲に比較的好くまとまっていることがわかる。本家は、芝・内出・松本の3区の境界部分、言い換えれば、塊村集落の中心部に集中している。ここは、彼らの先祖が開墾時に開基したと考えられる益田神社・八幡神社・神善寺の面前でもある。また、1939年の土地宝典によると、本家

の多くは、かつての主要道に沿って分布していることがわかる(第4図)。

#### b. 同族集団の機能

「親戚は一代、仲間は末代」という言葉が示すように、同族集団である仲間の役割は、とりわけ第二次世界大戦以前においてはきわめて重要であった。すなわち、仲間の構成員に生じた冠婚葬祭などの各種通過儀礼の主導的運営に加え、屋根の葺きかえや家屋の修復・増築の手伝い、あるいは仲間に病人がでたり、家主が戦争に徴兵された時の、田植えや稲刈り、芋掘り、麦播きなどの農作業の手助けなど、

仲間は互助的な機能を果たしていた。仲間に生じた不都合な問題は、仲間全員が集り、本家と相談のうえで事が運ばれた。本家は、その経済力と権威を背景に、分家を庇護統制していたのである。

しかしながら、このような仲間も、第二次世界大戦以降は、人々の生活水準の向上などに伴い、実質的活動面において形骸化してしまった。その結果、現在では、精神面における仲間の連帯意識は、高齢者層を中心に依然として根強いものの、一般には薄れてしまっている。冠婚葬祭の主導的運営や檀家・氏子組織に仲間の機能を認めるのみである。

**出産・紐解・結婚** 子供が生まれた時には、仲間・親戚・近所の人・同行講のメンバーなどが招かれて出産祝が行われる。招待客は、3,000～5,000円程度の祝儀を持参する。初子の場合は特に盛大に行うこともある。また、男女とも子供が7歳になると、岡野姓の子供は八幡神社、その他の姓の子供は益田神社に御参りし、紐解が催される。紐解には、やはり仲間や親戚・近所の人などが招待され、神社に参拝した後、銚子や波崎の料亭で宴会となる。祝儀は1万円程度で、その他に入祝いとして2,000円～3,000円が別に包まれるという。結婚式の披露宴には、仲間・親戚・友人・近所の人などの他に、5年程前からは同行講のメンバーまで招待するようになり、銚子や波崎のホテルや料亭を利用して、盛大に行われている。招待客が100人を超す場合も多く、祝儀は2万円が普通という。

このように舍利地区では、出産祝・紐解・結婚式など、どれも極めて派手に行なわれる特徴があり、最近では、このような風潮を改めようとする意見もでてきた。

**葬儀・法事** 仲間が形骸化するなかで、俗に「葬式仲間」と呼ばれる程、現在でも葬儀における仲間の役割は重要である。葬儀用具の準備や費用の管理から、お寺への御布施にいたるまで、一切の運営が仲間によりとりしきられ、その役割は親戚以上であるという<sup>38)</sup>。お通夜には、当人見舞いとして500～1,000円程度のお金が包まれる。また焼香には、舍利地区住民のほとんどすべての家から人が訪れ、その数は最低でも150人は下らないという。香典は1,000～2,000円である。また新盆や年忌には、仲間・親戚・近所の人達が招かれ、僧侶の読経の後、墓参りを行う。そして、そのあと料亭で宴会となる。こ

の時には御仏前として、1戸あたり7,000円程度が包まれる。

#### IV-3. 檀家・氏子組織と同族集団

##### a. 檀家組織と同族集団

舍利地区では、同族集団により菩提寺が異なる。岡野仲間は、舎利の集落の西に位置する荒波地区の、真言宗松本山千手院の檀家であり、墓地だけを舍利地区の神善寺においている<sup>39)</sup>。この千手院は、岡野(かつては小神野と書いた)家と藤代家(現荒波地区の藤代惣右衛門一家を本家とする一族)により建立された寺で、延命地藏を本尊とする。波崎町史料によると<sup>40)</sup>、かつて千手院は、岡野玄蕃西隣の五兵衛隠居跡にあったというが、それを海よりの方に居住していた惣右衛門一族が、漁業の都合で利根川河岸の現荒波地区に移住した時に、千手院も一緒に移したといわれている。岡野家と藤代家は、千手院檀家の世話人として、現在でも深い関係で結ばれている。また、堀口仲間は、本郷地区の真言宗嶋崎山宝蔵院の檀家で、やはり墓地だけを舍利地区の神善寺においている。

これに対し、岡野・堀口仲間以外の同族集団、すなわち、野中・溝口・山口・田向仲間は、舎利の中央に位置する益田山神善寺を菩提寺とする。神善寺は、1095(嘉保2)年の開基で、大日如来を安置する真言宗智山派の寺である。釈迦堂本仏として安置されている釈迦涅槃像は、県指定の文化財で、この胎内に仏舎利が受け継がれているという言伝えから舎利の地名が生まれたと言われている。現在、神善寺の檀家総数は約280戸で、檀家総代は、内出、松本から2人、芝から1人選ばれている。

##### b. 氏子組織と同族集団

舍利地区には、益田神社と八幡神社の2つの神社がある。このうち益田神社は、野中・溝口・山口・田向・堀口仲間の神社で、農業の神である大己貴命を祭神として奉っている。益田の名も、この地が稲作に適していたことを示すもので、砂丘地でありながら葭沼・谷中・鶯沼などの水に係る小字名が土地宝典に多くみられることは、これを暗示するものといえる(第2図)。一方、松本にある八幡神社は、岡野仲間の神社で、応神天皇を祭神として奉っている。このように、舍利地区では、2つの神社の氏子がそれぞれ異なった同族集団から成り、同族集団と

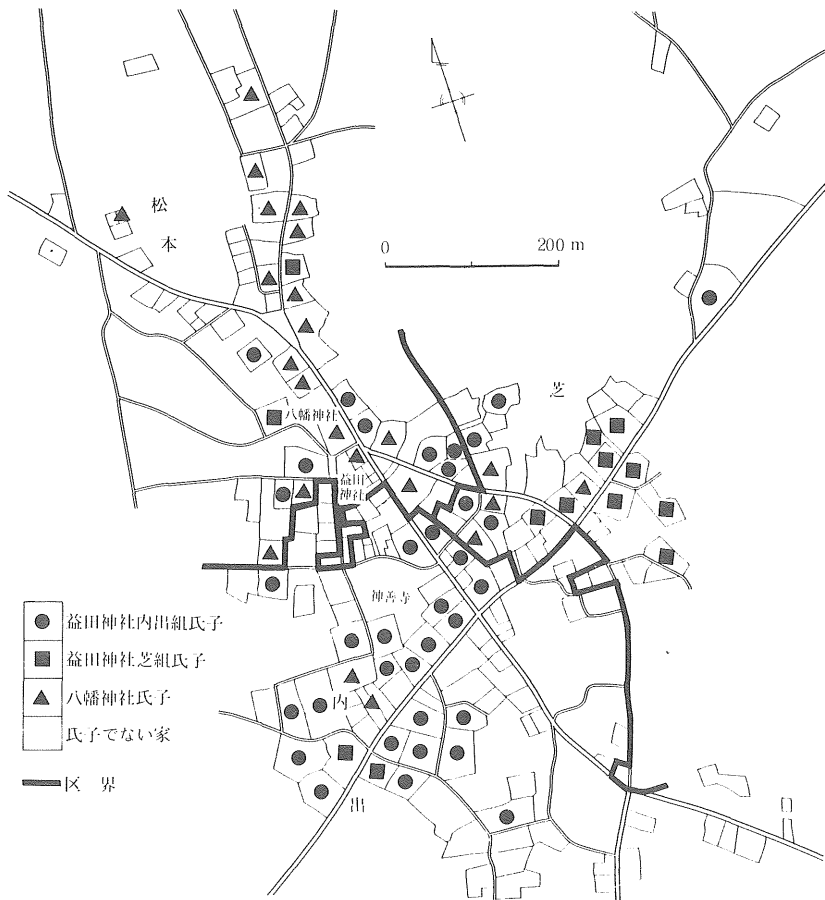
神社が強い結びつきを持っていることを示している。

第14図は、益田神社と八幡神社の氏子の分布図である。氏子となっている家は、仲間の構成員すべてではなく旧家に限られている<sup>41)</sup>。益田神社の氏子は、芝組と内出組の2つに分けられている。芝組は、主に芝を中心とする氏子の集りで、13戸から構成されている。一方、内出の氏子を中心とする内出組は、36戸から構成される。益田神社の氏子総数は、舎利地区以外の氏子をあわせると50戸となる。現在、氏子総代は芝組から2人、内出組から3人が選ばれており、内出組の場合、野中・溝口・山口姓から1人ずつ氏子総代が選出されている。芝組・内出組とも、かつてはそれぞれ15aと20aの祭田を所有し、氏子祭りの米にあてていたが、現在は祭田は使用されて

いない。これに対し、八幡神社の氏子は全部で24戸であり、岡野24軒頭と呼ばれている。八幡神社の祭田は40aである。

氏子に課せられた主な仕事には、社の屋根の葺きかえや修理、境内の清掃など、神社の維持管理に必要とする費用や労働力の提供、あるいは神事(氏子祭り)の運営などがある。両神社とも、1年ごとに輪番制で祭礼当番の家を決めており、当番にあたった家は、毎月1日と15日の2回、境内のそうじを行うことになっている。氏子が内出組と芝組の2つに分かれている益田神社の場合には、当番は各組から1人ずつ選ばれる。清掃は、内出組の当番が社の周囲、芝組の当番が鳥居の周囲といった具合に、清掃の分担場所を組により分けている。

氏子を中心に行われる神事は、益田神社の芝組と



第14図 舎利地区における氏子の分布  
(1985年、聞きとりによる)

内出組、八幡神社のいずれも10月10日に行われる。両神社の神事とも、豊作豊漁の感謝祭で、祭礼当番の家で催される。現在は、祭に参加するのは、1軒2人(親子または夫婦)が普通だが、1965年頃までは、祭には氏子は勿論のこと、当番の家の仲間や親戚までが招かれたという。氏子は、「掛け米」と称し、財産の多少により、玄米もしくはそれに相当するお金を祭の費用として当番の家に納めた。この風習は、現在でも「掛け米の日」として踏襲されており、10月1日には、米の代りに現金で会費が徴収されている。両神社とも、現在の会員は1世帯5,000~6,000円程度である。

このように、舎利地区の社会組織において、重要な役割を果たしてきたのが同族集団である。冠婚葬祭や氏子・檀家組織などとの関連から判断して、これらの集団は、集落の開発過程に深く関わっていると考えられる。しかし、近年このような同族集団の形骸化は著しく、舎利地区の社会組織が、血縁関係にもとづく従来の伝統的特質から徐々に脱皮し始めているとみることができよう。

## V むすび

農村地域を対象とした地理学的分析にはさまざまな方法が用いられてきたが、なかでも自然的・位置的条件の評価、土地利用と景観の観察、現在の生業の特徴とその形成過程の解明、地縁的・血縁的にさまざまに結びついている社会組織の分析は、最も基本的なものであろう。この研究は、これらの基礎的作業を通して、波崎町舎利地区の生活形態の特徴を明らかにしようとしたものである。

波崎町南部に位置する舎利地区では、温暖であるが降水量が少く、ことに夏の水不足は深刻である。さらに砂質土壌が卓越することからも、乏水性の地域である。飛砂から耕地や集落を守るために、防風林が集落の東に多く分布している。新田集落の多いこの地方にあって、調査地域は中世以前に起源を持つ古い集落である。神社と寺院を核に、生け垣に囲まれた落ちついた雰囲気をもつ家屋が不規則に集まる集落景観からも、その歴史の古さが感じられる。しかし、さらに集落の観察を続けると、カヤ葺きや瓦葺きの寄せ棟造りの伝統的家屋が多い中に、豪華な二階建ての瓦葺き入母屋造りや鉄筋コンクリート造りの家屋、そして瓦葺き切妻造りの家屋が混在し

ていることがわかる。生け垣や竹垣に代わって、ブロック塀が目立つ部分もある。主屋と肥料舎と納屋といった古くからの宅地内の建物の組み合わせの中に、巨大な作業舎やガレージが含まれている例もある。多くのタバコ乾燥小屋がみられるが、いずれも現在では本来の目的に使用されておらず、ピーマンの袋づめ作業や千両の選別、そして農業資材の保管のために利用されている。全体的には伝統的性格を残しているが、新しい変化が着実に起きていることを、集落景観から読みとることができる。

集落の背後の土地利用をみると、地面より1mから2mも深いところに造成された掘下田と掘り上げた土砂を積み上げてつくった掘上げ畑が卓越している。掘下田の周囲には松が植えられ、飛砂を防ぐ役割を果たしている。掘下田は部分的に放棄されたり、埋め立てられ畑に転換されている場合もあるが、全体的には管理がいきとどいている。数は多くないが、ビニール水田も点在している。他方、畑地で卓越するものは、ピーマンのビニールハウスと千両のガクヤ、そして若松の栽培といった園芸農業的土地利用であり、甘藷や麦類、落花生、タバコなどの栽培はほとんどみられない。

現在の農業経営の分析から、ほぼすべての農家が水稲作を行っているが、これは自給を目的とするものであり、ピーマン栽培が最も広く普及し、重要な収入源であることがわかった。千両や若松栽培を行う農家は、少数の大規模企業的経営と多数の小規模経営に分かれており、後者はピーマン栽培や自給的水稲作を組み合わせている。前者は生産から出荷までの一貫経営を行っており、巨大な作業場などの整備をし、全国の出荷網をもっている。水稲単作や水稲作と普通畑作を組み合わせる経営が全体の4分の1余りを占めるが、ほとんどが経営規模の小さい兼業農家によるものである。全体としては、園芸農業的性格が強いといえよう。

さらに、兼業農家および非農家が多いのもこの地区の特徴である。舎利地区の芝の例によると、全戸数41のうち農家は16戸にすぎず、残りの25戸は非農家であった。兼業農家および非農家の大部分は、鹿島臨海工業地帯や銚子市街地への恒常的勤務により収入を得ている。兼業農家では世帯主夫婦がピーマンや千両の栽培と水稲作を行い、息子が恒常的勤務に就いている場合が多い。



このような生業形態は、最近10数年の間に生じたものである。大正末期以降の舎利地区の生業変遷を、農作物の組み合わせと農外就業からみると、4つの時期に分けることができた。1940年頃までは掘下田における水稲作と畑における甘藷と麦類の二毛作が農業の中心で、千両やタバコ、野菜類など小規模な商品作物栽培も行われていた。その他に地曳網漁やさまざまな賃労働があった。1940年から1955年頃までは戦時下および戦後の食糧増産期で、農業は水稲と甘藷、麦類の栽培にほぼ限られた。しかし、1955年頃から千両やタバコが復活し、その外に早掘馬鈴薯、大根、シシトウなどさまざまな野菜類の導入が試みられた。ビニール水田造成によって、水稲作を拡大する農家もあった。本格的な園芸農業が確立するのは1970年以降であり、ピーマンのビニールハウス栽培の普及を契機としている。この頃から千両の大規模経営が出現し、鹿島臨海工業地帯の開発により農家の兼業化が進み、非農家が増加した。

他方、舎利地区の現在の社会組織をみると、基本的には並存する同族集団から成り立っている。氏子や檀家などの宗教的集団も、同族のまとまりと深く関係している。しかし、近年同族集団は労働力や経済面での相互扶助といった実質的機能を失い、冠婚葬祭を通じての結びつきに限られるようになり、形骸化の傾向が著しい。

舎利地区は全体的に開拓が遅れた鹿島半島にあって早くから開けたところであり、相対的に自然条件に恵まれていたところと考えられる。乏水性の砂丘地でありながら地下水位が比較的高いことを利用して、掘下田が造成された。飛砂を防ぐために防風林がつくられ、畑には耐旱性の作物が栽培された。しかし、温暖とはいえ乏水性の地力の低い砂丘地の農業は不安定であり、たびたびおそった凶作のために相互扶助の性格が強い同族集団の存在が不可欠であった。防風林や道路の維持、掘下田の床下げなど生産基盤の確保に共同の労力が必要であったし、田植や稲刈などの農作業、漁撈作業、家屋の改築、屋

根のふきかえ、精神的な支えであった社寺の維持管理にも同族集団は大きな役割を果たしていた。

米と甘藷、麦類といった自給的作物生産の基盤が不安定なゆえに、他の収入なしでは生活が困難であり、このことが千両やタバコ、スイカなどの小商品作物生産が早くから導入された1つの要因であったろう。また、さまざまな賃労働や副業からの収入が必要であった。波崎の市街地に近く臨時的雇用機会があったことや、野菜の需要があったことが有利に作用した。自給的農業と小商品作物生産、そして賃労働を組み合わせる生活は基本的には1960年代まで続いたと考えられ、このような状況を維持する上で、同族集団に基づく旧来からの社会組織の果たす役割は大きかったであろう。

しかし、1950年代後半からの商業的農業部門の拡大によって伝統的生活形態がくずれ始め、さらには1970年頃からのピーマンの施設園芸の導入、通勤者の増加によって生活が豊かになるとともに、多様な就業が混在するようになった。従来のような相互扶助や共同作業の必要性が低下し、同族組織が急速に形骸化していった。高度に集約的園芸農業形態ではすべての耕地を十分に活用するには労働力が不足し、兼業化が進んだこともあって、荒地が増加した。舎利地区における生業面からの新しい生活形態が確立するのが1970年代である。しかし、景観や土地利用の変化は、集落の生業、すなわち機能面より遅れているように思える。今後、一層家屋の新改築が進むとともに、現在進行中の国営や県営の農業水利事業と圃場整備事業が完成すれば、景観の面でも機能の面でも舎利地区は新しい生活形態に移行することになろう。

このような生活形態とその変化を基本的に規定するのは乏水性の砂丘地という自然的条件であろう。さらに雇用機会や農産物市場の存在といった位置的条件や経済的環境の変化が、集落住民の志向や伝統と結びついて、生活形態をつくってきたといえよう。

本稿をまとめるにあたり、舎利地区芝区長の田向進氏を始めとする現地の方々から多大な御協力を賜った。また、波崎町役場の職員の皆様には、資料収集の便宜をはかっていただいた。さらに、製図の一部は、筑波大学の小崎四郎・宮坂和人両氏にお願いした。以上記して厚くお礼申し上げる。現地調査の際には文部省科学研究費補助金一般研究(C)「関東地方の台地利用における陸田の意義」(代表者石井英也、課題番号60580185)による研究費の一部を使用した。

#### 注および参考文献

- 1) 多田文男(1948): 鹿島半島の侵食砂丘. 地理学評論, 21, 282~288.
- 2) 西田正夫(1934): 常陸鹿島地方の文化地理学的研究, 集落の発生と移動を論ず. 地理学評論, 10, 301~318.
- 3) 波崎町史編さん委員会(1981): 『波崎町史料Ⅰ』波崎町, 196~203.
- 4) 「常陸風土記」に安是の湖(あぜのみなど)が記された頃は、荒波地区付近で香取浦が太平洋に開いていたとされ、その後の河川や沿岸流の作用で波崎半島の幅が広がり、また南に伸びたとするならば、舎利地区は現在よりかなり水辺に近い場所に立地したのかもしれない。
- 5) 中山兼徳・尾崎 薫(1967): 関東普通畑作地帯における作付体系に関する調査研究. 農業試験場研究報告, 11, 85~144.
- 6) 茨城大学地域総合研究所編(1974): 『鹿島開発』古今書院, 159~192.
- 7) 1985年5月の土地利用調査は、1983年撮影の縮尺3,000分の1空中写真をベースマップにし実施した。
- 8) 前掲3), 31~32.
- 9) 波崎町史編さん委員会(1980): 『写真集波崎町の歴史』波崎町役場, 21~23.
- 10) 波崎町史編さん委員会(1981): 『波崎町史料Ⅱ』波崎町, 25~26.
- 11) その際、耕土をまず一か所に集めて、その下の砂質の心土を掘り下げ、再び耕土を戻すという作業を行う。
- 12) 「ガクヤ」を千葉県側の借地につくるのは、千両の連作障害や病気を防ぐためである。しかし、千葉県側でも連作障害や病気が発生してきたため、再び波崎町内に戻りつつあるという。
- 13) すでに報告されているように、玉造町、出島村、鉾田町徳宿本郷などの諸地域と同様、伝統的屋根型が現在の民家の屋根型に継承されている。佐々木史郎(1979): 霞ヶ浦における家屋景観. 霞ヶ浦地域研究報告, 1, 15~24. 山下清海・黎経富・工藤泰子(1982): 出島村における伝統的家屋景観の変容. 霞ヶ浦地域研究報告, 4, 29~37. 森 勝彦・井上 孝(1985): 集落景観の特性-鉾田町徳宿本郷の事例-. 地域調査報告, 7, 133~143.
- 14) 1985年12月の聞き取りによる。
- 15) 「シタベヤ」とは、本来は下男の寝室の呼称である。
- 16) 新年には仏壇の東側に「トシガミサマ」が祭られ、注連縄を東向きに張りカガミモチを供える。
- 17) 杉本尚次によると、広間型から四間取り型への変化は、全国的には江戸末期から明治期にかけての現象であるという指摘がされており、霞ヶ浦沿岸地域においてもこれを傍証する事例が、山下・黎・工藤によって報告されている。杉本尚次(1977): 『地域と民家—日本とその周辺』明玄書房, 72~73. 山下清海・黎経富・工藤泰子(1982): 前掲13) 30~31.
- 18) 佐藤甚次郎(1962): 日本農家の建物構成と配置方式. 人文地理, 14-6, 1~20.
- 19) 前掲3), 16~23.
- 20) 中島峰広(1964): 茨城県鹿島半島南部砂丘地における堀下田の経営と畑作経営. 地理学評論, 39, 84~102.
- 21) ことに早魃の際には食糧不足で苦しんだ。1927年の早魃の時は、舎利地区から多くの人々が波崎の水産加工場へ賃労働にでかけたとされるし、1935年頃には国から南京米の放出を受けた。
- 22) 前掲10), 565~574.
- 23) ピーマンが1,070a(14%), マスクメロン等他の施設園芸作物は75.3aを占める。

- 24) 砂質水田においては、稲は秋落現象を呈することが多く、そのための対策として、施用効果の高いマンガン投入することがある。植物栄養・土壌・肥料大事典編集委員会(1976)：『植物栄養土壌肥料大事典』養賢堂，614～617。
- 25) 千両は、月最低気温が $0^{\circ}\text{C}$ 以下、あるいは日最低気温 $0^{\circ}\text{C}$ 以下が1週間続く土地では育たない、照葉樹林に生育する常緑小低木である。
- 26) 宮原弘匡(1984)：波崎町における千両栽培について、筑波大学大学院教育研究科レポート(未発表)，4。
- 27) 千両に用いる肥料としては、堆肥、鶏糞、油粕等の有機肥料、およびケイ酸、クロマンガ、リン酸カリを含む無機肥料が用いられ、合わせて10aあたり約40kgが圃場に投入される。チッソ肥料は病気を誘発するので使用されない。
- 28) 市場に直接出荷する栽培農家と出荷業者に出荷を委ねる栽培農家とでは、千両の成木1本の金銭価値が異なる。最上等の成木1本を、前者は600～700円で市場に卸売りするのに対し、後者は100円程で出荷業者に売り渡す。前者に諸経費がより多くかかるとは言え、大きな差異である。
- 29) この労働力は、千両の収穫・出荷と兼任の雇用労働力である。収穫・出荷期を除くと、3年間で10a当り延べ100人の労働力があれば、若松栽培は可能である。
- 30) 1983年の茨城県農業基本調査によると、舍利地区には加温ビニールハウスでピーマンを栽培する農家もあるが、その収穫面積の合計は46a弱であった。
- 31) その重量による内訳は、菜種粕900～1,200kg、堆肥1,000kg、鶏糞1,500kgで、有機肥料が合計3,400～3,700kg、無機肥料が600kgである。
- 32) この対策として、その土地を休耕にしたり、有機肥料を通常より大量に施す。あるいは、禾本科のトウモロコシを栽培し、ピーマンに必要な成分の栄養素をその土地に回復させる、という手段をとっている。
- 33) 前掲3)，205。
- 34) 舍利農村集落センターは、茨城県から550万円、波崎町から550万円の融資を受け、地元が700万円を負担して1985年5月に完成した。
- 35) これらの講は、宗教的機能を徐々に弱め、逆に娯楽性を強めている。
- 36) 蒲生は、このような同族集団を、東日本では「マキ」とか「イットウ」、「ジルイ」などと呼称することを示している。蒲生正男(1958)：親族。大間知篤三他編：『日本民族学体系3』平凡社，233～258。
- 37) それぞれの自家間の系譜関係は、今のところ明らかではない。
- 38) 仲間家は家を中心に結びついている一種の親戚であるが、仲間以外にも、家を継がなかった自分の兄弟姉妹などの親戚がいる。
- 39) 小神野玄蕃家所蔵の古文書によると、先祖は永享12年に鹿嶋よりここに来、八幡神社を創立し、また文安元年には、松本山千手院を開基して岡野家の祈願寺とした旨が記されている。
- 40) 前掲3)，410～415。
- 41) 神社の財産分与などの問題があるためである。